

---

# 幽霊と超能力と突然の終焉

柊鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊と超能力と突然の終焉

### 【Nコード】

N6673F

### 【作者名】

柊鏡

### 【あらすじ】

主人公は変人ばかりの部活に強制入部させられた。

## 一章

—

「ポアします」

退室しようとしただけなのに、こんな事いわれたら、それこそ、ギョルンと音を起てて振り返り、鳩豆はとまめな顔をして、ガン見しなくては恐らく人間として間違っている。おかし過ぎる言動は脳味噌に脊髄反射を促すと脳内法則で決まっている。定説です。

「とりあえず、話半分に退室するなら、ポアします」

俺の目の前の人物は、端整な造作の顔に、いつてることは非常にアレなのに優等生ですと主張するような真面目な表情を湛え、もう一度いう。ポア——昔前に世間を震撼させたインコ真理教が確か、ことあるごとにポアポアいつてたような気がしないでもない。意味は何だったか。思い出せない。

ポア——響きそのものは、どこか可愛らしいのに、ポアって名前なまえのワンちゃんがいっても違和感なさそうに感じるのに、なぜこんなに怖気が、背筋がゾクゾク、もちろん、興奮とは真逆の意味で、するのだろう。この不可解な音、意味不明、そして、発言者の悠然とした振る舞い、どこか泰然ともしていてなおさら、不気味さを引き立たせる。

「待て待て、楓かえで。ポアは早い、シャクティパットくらいにしておく  
といい」

今退散しようとしている教室の奥、柔和な笑みを浮かべる人物。キムタクとナカタク（誰？）を足して二で割った感じの男がいう。出来損ないイケメンと呼ぶのが一番妥当と思われる優男だ。

「明史あきひみい。それは違う。大いなる神の真理の元に断じて違う。カメとスッポンくらいには違う」

ポア女はチツチツとマンガチックな否定をしながら、断固とし

て譲りません、これも定説です。といった風でいい放つ。

すいません。カメとスツポンの違いは、精力がつくか、つかないかでしか分かりません。

「強制連行。アウシュビッツに倣うといい」

新しい声が割ってはいる。

待て。それこそ、待て。今から俺は毒殺されるのか。ガス室に連れ込まれて、プシュウウとガスにポアされるのか。あれ、ポアの意味が凄くしつくりくる。不思議だ。

出来損ないイケメンの隣で物騒なことをいうのは一見、大人しそうな女子。タイから察すると同じ学年。俺と同じということは、新入生ってことだ。彼女は熱心に、本を読んでいる。しかも、本に目をおとしたままだ。こちらには一瞥もくれない。少し、何を読んでいるのか気になる。

少し腰を落とし、体勢を低めて、遠巻きながら、覗き込む——アンの日記？ なぜ、それを読み、そういうセリフをいう。

全く、変なのばかりだ。ああ、頭が痛い。

確かに、分かってたさ。この教室に来ることを決めたその瞬間から、こういう部活だったことは、だけど、変人はいいんだ。

なぜ、なぜ、だれも幽霊についてかたらない。いるのは、アンの日記を読みから感動を微塵も示さずアウシュビッツをブラックに使用するどっちかっていうと文芸部か読書委員会じゃない？ って感じの一年生が一人と、インコ真理教かぶれと思しき、ポアをやたら連呼する、顔だけは美人の二年生と、遺伝子の不作為でイケメンになり損なったエスパーと部員から認定されている二年生。計三名あれ、心霊研究会って部活動紹介には、四名ってあったような……。ここは、心霊研究会じゃないのか？ そう俺は問いたい。

説明を聞きにきた入部希望者に、ESPの話と宗教の話しかしないのはどうしてか。

だから、「もういいです」と退室しようとしたのだ。

心霊といえば、幽霊。オカルトと幽霊は一緒じゃないんだ。わか

る？ カメとスツポンの違いは分からなくても、ここは分かって欲しいものだ。何？ それは母親に各ガ。ダムの違いを説明するのに似た行為だと？ 甘い、甘い。うちの母ちゃんはず。だけは識別できるんだ。

「明史い。サイコキネシスをお願い」

「ラジャーだ。ボス」

サイコキネシス。違う、それはオカルトであって――。

反駁しようとしたが、その暇なく口を塞がれた。ポア女が俺の口元を呼気できないんじゃないかというほどに、ぎりぎりと塞いでいる。美味い具合に片手で鼻まで覆う。ほんとに息ができない。

ついで、体が中を浮く。持ち上げられたのだ。出来損ないイケメンに。しっかりと、両脇を抱えられ、まるでお姫様だっこ。俺は全力で全身で拒否を示し、手足をジタバタするも意味はなく、俺はどんどん教室へ連れ戻された。

連行される！ 強制収容、ガス室はイヤだああ。

俺の心の声。最早、咆哮となって猛る。けれども、外にでることはなく。

すると、出来損ないイケメン、分かっているさと謂わ<sup>い</sup>んばかりに頷く。

「ガス室じゃないから、安心な」

リーディング？ エスパーか。って、騙されんぞ。そんなこと、普通分かる。十分な前フリがあつたし。

「むぐむぐ」

俺は教室中央に陣取る長机の入り口から見て、右側のパイプ椅子に座らされる。斜向かい目の前に、読書女。後方には出来損ないイケメンが陣取る。

そして、ポア女は俺から手を離すと、長机の周囲を巡って、俺の眼前に佇む。

「では、これより異端審問を始める！」

ポア女が高らかに宣言。宣言後、机をビシと叩いた手の方が痛い

くらいの勢いで叩き、本当に痛かったよう顔をしめ、手をふうふうし、気を取り直して、もう一度。

「これより、魔女裁判を始める！」

あれ、何か変わってない？

「部長。彼、男です」

読書女がまたしても声だけで突っ込む。

「む。ウィッチというのは、何も女だけではないのだぞ。中世に於いては——」

ポア女は反論を始める。

もういいです。色々、ゴチャゴチャし過ぎです。

俺は諦めた。もう、それは浅い浅い諦念です。それに、もう疲れだよ。パト。ツシュ。眠いんだ——。

もっとも、諦めた一番の理由はパイプ椅子に後ろ手を縛られたということなのだけれども。

「判決。破門をいい渡す！」

ポア女——もとい、部長は判決を下した。

いたくノリノリらしく、顔は嬉々としていて、前後の脈絡を知らないなら惚れそう。もう、大体、正体が掴めてきたので惚れないが。健全な体には健全な魂が宿って欲しいという。美人にもどうか、しごく真つ当な麗しい魂が宿ってくれないだろうか。ああ、世間は世知辛い。

「部長。入部してないのに、破門ですか。それとも第三ポチヨムキン教団からですか？」

第三ポチヨムキンって何だよ。ポチヨムキンってのは、ギル。アのキャラじゃなくてだな、ロシアの——。って、そもそも、第二とかあるのか。突っ込み所が満載すぎて、関西人でもないのにノリ突っ込みしてしまいそう。手は使えないけど。縛られてて。

「いいえ。人間、ヒューマニティー、ヒューマンビーイング、人た  
ることからの破門よ」

「おお、それでは今日から人外か。超能力者と肩を並べてラッキ  
ーだな」

出来損ないイケメンは俺の肩を嬉しそうに叩く。超能力者って『  
者』ってついてるんですけど——。いい加減、突っ込みを抑えきれ  
ず、口を開こうとする。

「よって、人権はない。なので、強制入部」

挟めない。割り込めない。有無をいわせない。こちらから口を開  
こうと上下の唇を動かそうとした瞬間、発言してくる、ジャストタ  
イムぶり。侮りがたし。

部長はスカートのポケットからくっしゃくっしゃになった入部届  
けを出す。

記入欄は実に淡白で、氏名とクラスのみ。担任印いらず、各部活  
の部長の印と入部希望者の印があればオーケーだ。俺が入学した、  
この秋風学園は生徒の自主性とやらを重んじるがモットーでできる  
かぎり教師は生徒の活動に干渉しないという方針から、このような  
簡素な手続きで入部ができるのだ。

しかし、これには裏の使用法もあり、活動資金欲しさに幽霊部員  
を多数確保する部活も多いらしい。学校側はこの事態を重く見てい  
るようだが、生徒会が改正に頑として歯向かっているのだという話  
しげしげと、入部届けを見る。

あれ、俺の名前がすでに書いてある。持参した入部届けはポケッ  
トの中にあるはずなのに。抜き取られた？ 違う、俺の筆跡じゃな  
い。でも、珠美優たまみゆうと確かに書いてある。謎だ。

しかも、部長の印はすでに押されている。印とっていいのか、  
よく分からない梵字のようなものが朱で押されているだけだが——。  
そもそも、受理されるのか、そこから甚だ疑問だ。

「ちょ、待って下さいよ」

「うんむ。言訳を聞こう。神は寛容であらせられる」

大仰にそして緩慢に首を縦に一度ふる部長。

「俺はオカルト部じゃなくて、心霊研究会に入りきたんです」

「ここはレイケンだぞお」

何をバカなことを部長は鼻を鳴らす。あたり豆ンチザウルスと謂わんばかりだ。

「愚民」

ぼそつと隣で読書女。中々、大きいお友達が喜びそうない感じの毒舌。しかし、俺は大きいお友達ではなく、中くらいの友達なので、ただ、ムっときたただけだが。

「だって、エスパーとか神とかアウシュビッツとかそんなのばつかで」

「いいか、一年生。心霊とはプネウマのことだ」

何かもつともらしいことをいい始める。哲学談義でも始めるのか。だとすると、ますます、心霊研究会じゃないような――。と思いつつ、話を聞こうと身構える。

「まあ、それはおいといてだ」

おいとくのか？　じゃあ、何の前フリだ、これ。一気に脱力。

「きみはなぜ、幽霊に心引かれる？」

「その非科学的なところです」

「ん？　なら、エスパーも神も一緒でしょう」

あれ、途端にリアリストになる。よく分からない人だ。やっぱり、正体掴めてません。神とかいつてた人に真顔で、そんなこといわれども困る。

「違います。さっきのカメとスッポンくらいには」

「うんむ。そういうものでしょう。人は何かを信じる、信じてなくても魅力を感じる。その感情の源泉とはどこだろうか？」

「心ですか？」

「大正解」

部長の顔がよくなりましたとオチコボレ生徒が艱難辛苦の末にやつと正解を掴み取り、それを褒め称える教育熱心な今や絶滅危惧種

だろう、その類の教師に酷似した感じに、楽しそうに彩られ、華やいだ。

「だから、その心を研究しよう、そういう趣旨なのだよ！」

なんか、騙されているような。何かこう、しっくりこない。けれども、口答えできそうになく、俺は下を向き、もしもじとする。反論、は——どうしよう？

しばらく、沈黙が続く。

部長の期待の籠った眼差しが頭頂部に注がれている気配がひしひしとする。

背後からも何か熱い視線。何を期待されているか、そんなもん、一つしかないのだが。

「おおお、遅れました」

沈黙が破られた。ガララと教室の引き戸が忙しく開く。咄嗟に声のする方向へ目を向けた。

女子生徒が立っていた。肩で息をしている。走ってきたのだろう。一目見て——惚れた。いや、さっきまで部長に惚れそうだったかいつてたけど、そういうのは全部吹っ飛んだ。好み、ストライクゾーン、ど真ん中、これは場外ホームランとかつとばさなくては人間ではない。定説です。

肩甲骨あたりまで伸びた流れるような直毛の髪、ロングヘアを纏めてもいないのに頭部に居心地悪そうに据わる紫のバレッタ、遅れたことを全身で表現するわたわたする仕草、それを強調するウルウルした、某サラ金チワワライクな瞳、こじんまりとした上品な口元、そして今、急いできたがために上気した頬、綺麗な桜色だ。

おお、部員か。四人目のご登場だ。俺は拍手喝采で出迎える！

「おお、木霊遅かったね」

木霊さんというらしい。タイは緑色、二年生。敬語で現れたので、つきり一年生かと思つてら先輩だったようだ。恋に第一の障害が、ががが、入部してしまえば帳消しだ。同じ部活の仲間なら、先輩後輩という学年の差、クラス替えがあろうとも教室が絶対一緒になら

ないという物理的な障害も取り払うことがかなう。

しかし、このまま、このよく分からない人々の中に入り込んでいいのか？ 逡巡。

「トイレでちよつと……」

「あやあ、また出た？」

出た？ トイレで出る？ それは一つしかないだろう。幽霊に違いない。

過去、いじめで死んだ生徒の霊。今も自分をいじめ抜いた生徒を恨み、夜な夜な出る。というか、今はまだ日は沈んでいないし、そもそも、秋風学園過去三十年の歴史で生徒が死んだ話は聞かないんだけどね。まあ、ロマンですよ。ロマン。

「あ、はい……」

「まあ、それはおいといて」

ほんと、棚上げが好きな人だな、と思う。今まで何回、おいといてといっただろう。まだ、あつてから三十分くらいしか経ってないのに。

「一年生。ちゃんと専門家もいるんだよ。どうどう？ これで入るでしょう？」

ずいと鼻面がくつつきそうなほど、部長は接近してくる。鼻息がかりますって！

思わず、目を逸らし、なぜかそれを同意と受け取り、「勝った」とガッツポーズをする部長。

「何の勝負ですか！」

「新入部員さん？」

いつの間にか隣にきていて木霊さんが座っている俺と同じ位置まで目線を下げていう。そんな長いまつげ越しのケガレのない目で見ないで、見ないで、顔が赤らむから。

そして、答えてしまった。

「はい」

「よっしゃあ、信者確保お！」

部長は歓喜して半ば叫んだ。

「それでは自己紹介から始めよう」

部長が音頭を取り、新入生歓迎自己紹介という何の変哲も奇知もないイベントが始まる。

長机には四つしか椅子がなかったので、新しく一つ隣の部室から拝借し、机の左右に二つづつ、上座に部長が陣取る。

「しかし、五月になって新しくきてくれるなんて嬉しいなあ。ほんと、うち、いまんとこさ、唯<sup>ゆい</sup>だけでさ」

唯というのは読書女のこころらしく、彼女はこくこくと頷く。さすがに、今は読書は中断中。しかし、相当本好きらしい彼女は、部長が自己紹介するよといっても止めなかったたので、この中断は半ば部長の半鉄拳制裁気味の行為による所が大きい。

「んじゃ、まずわたしから。えっと、部長の鬼頭<sup>きとう</sup>楓<sup>かえで</sup>。珠美くん、じやなくって、優くんって呼ぶね。は、中々いい男なので楓ちゃんと呼ぶことを許可します。ただ、ハズいなら楓先輩でもいいけど、できればファーストネームでお願い」

フレンドリーだ、凄いフレンドリーだ。しかも、超楽しそうだ。

新入部員がそんなに嬉しいですか。嬉しいだろうなあ。

だって、現在俺を含め部員五名。どう見ても弱小の枕詞を冠するにふさわしい。活動費も恐らくすずめの涙。もつとも、心靈研究会が何に部費を割くかっていわれても考え付くものはないし、研究会という名前が実は部ではなく同好会の可能性も示唆しているのだが。「専門はポチヨムキン神学。聞いたことないかもだけど、マニ教みたいなもの」

どういう意味でマニ教なんだろう。途絶えた？ それとも、ごつた煮って意味？ それとも教祖がマニだから？ ってこれは、ゾロ

アスター教とかキリスト教もそうか……。深く考えるとドツボに嵌りそうなので、自分で自分を思考停止に追いやることとする。

「しかも、驚くことなかれ。わたしは第三ポチヨムキン教団教団長にして教祖さまなのだよ」

いや、驚かないけど。いまさら。

「ついでに神」

神ってあんたか！ と合いの手をいれようとすると、

「つてのは嘘」

嘘かい！ しかし、この人突っ込みの予断を許さない。なんて、突っ込み殺し。

「信徒は今の所、優くん含めて八人」

「含めないで下さい」

「むう」

不満そうに整った柳眉を屁の字に曲げる。なにせ、さつき信者確保宣言したばかりだし、きつと、落胆も一人。ひとつお可哀想なので、話を伸ばす。

「それに、意外と多いんですね」

「親父と妹も信徒だからね」

なぜかウインクを送ってくる楓先輩。

視線を逸らす。嫌な家庭環境を想像してしまう。うわあ、痛いファミリィなんだろうなあ。それはそれは、深遠な意味で。創。学会的な意味で。

「それじゃ、年齢順で行こう。ネクスト、エスパーマンです」

楓先輩は自分の右手に座る出来損ないイケメンを掌で示す。エス

パーマン？

「エスパーマンこと井塚明史。いのつかあきひろみ趣味は透視でウハウハ」

「投資ですか？」

「ファンドとか？」

「そう、透視」

「凄いですね」

高校生で株取引や仕手に通じているってのは将来的にも――。

「そりゃあね、穴も空いてないのに女子更衣室の壁に目を引っ付けてるんだから」

あれ、話が噛み合っていない。女子更衣室？

「透かし見るで透視」

我慢できなかったのか、唯が疑問に答えた。

「説教部屋行きですね……」

生徒指導の教師に竹刀でぶたれて、教育的指導なの元に地獄を見るだろう。退学という恫喝と引き換えに教師のストレスの捌け口に……。

「大丈夫、見えてないから」

さらっと流すようにいう、楓先輩。

「な、俺のESPを疑うとは、楓。それでも部長か！」

クワッと両目を見開き、井塚先輩は楓先輩を見る。すると、

「破門するぞお？」

脅すではなく、柔らかく楓先輩はいう。顔もニコニコしている。

しかし、井塚先輩の反応はといえば、そこに俺とは違う意味を見出し、

ガクガクブルブル。

「え、何で？」

「破門怖いよお」

トラウマを思い出してPTSDにかかった患者のように全身を震わせている。何か、過去にあったのか？ 知りたい、凄く知りたいでも、多分、訊かない方が身のためだと思ったので黙っておく。

「脅しちや駄目じゃないですか、鬼頭さん」

どうしてか、タメなのに敬語の木霊さん。そういえば、次は木霊さんの番だ。下の名前はなんていうのだろう？ ワクワクしてくる。

「はい、それではエスパーマンが何かトラウマってる所で次、木霊」  
井塚先輩はどこかへ精神が飛ばされたので木霊さんにお鉢が移る。

「えっと、木霊です。木霊<sup>こたますな</sup>沙子です。えっと、多分、今は唯一の幽

霊専門です。珠美くんは幽霊好きですか？」

「はい」

「いいですよ、和みます」

幽霊を和むというのも変な気もするが、問題ない。今重要なのは、このセリフとともに繰り出された矢吹。ーのアップーカット並の破壊力をもった微笑の方だ。

ああ、こっちはあなたが和みます。木霊先輩。そんな可愛らしい目で見ないください。何もかもを捧げたくになりますから。あなたの前でなら、心も体も全てを晒してもいいです。産まれたままの姿とか、特に晒したいです。

「おお、和んでる和んでる、そして、少しエロってる」

人を肴に話を沸かす酒飲みの眼で俺をみる楓先輩。う、なんて洞察力。さすがは教祖さま。人心掌握に長けていらっしやる。

「え、ええ！ 私和みますか！」

ワタワタする木霊さん。いい。もっと、ワタワタして欲しい。

「優くんは大変和んでいる、そして、結構な割合でエロっている。

木霊の——。とまあ、これはおいておいて」

いい掛けて楓先輩は止める。助かった。いや、もっとワタワタが見たかったのだから、コンチクショーというべきか。

「んじゃ、最後、期待のルーキー、どうぞ」

「期待のルーキーです。又野唯<sup>またのゆい</sup>です。アイヒマンの如く出世する所存です」

アイヒマンの如くって……。パートタイムのSSだったアイヒマンがホロコーストで功績を挙げた故事（？）に倣うってことか？  
最後、モサドにキルされちゃうよ？ いいの。それ？ TV中継で色々されちゃうかもよ？

「ハイル——」

ナチヲタか、ネオナチですか、この子は。読書家じゃなくて、文芸部が似合いそうっていう第一印象早急に撤廃を表明する。

「カエデ——！」

「さすが、唯。分かつてる子」

喜ぶ楓先輩。頭をなでなでし始める。嬉しいの、そこ？  
色々突っ込み所は多い。

けれど、こうして一員に加わってみると悪くないと思える自分がいた。珍妙キテレツな空気だが、拒否感<sup>きへきかん</sup>は沸いても嫌悪感<sup>けんあくかん</sup>は沸かない。慣れの問題なのだろうか。

愛らしい先輩、頭の沸いた三人の仲間。健全潔白な高校生活にはならないかもだが、案外そういうのもいいかなと思う。平穩無事<sup>へいぶんぶじ</sup>つてのは詰らないの美辞麗句<sup>みじれきく</sup>的表現なのだから。

「じゃあ、最後。二代目——はおいといて」

おいとき過ぎです。先輩、失言し過ぎですか？　なら、もうちょっと考えて喋ってくださいよ、ほんと。教祖さまなら漫談<sup>まんたん</sup>じゃなかった、説法<sup>せっぽう</sup>とかもしなくちゃ、でしょ？

「明史を凌ぐイケメンのニュービー、どうぞ！」

イケメン。女の子にいわれるとどこかこっ恥ずかしい。

しかも、手を小さくクラップしない、楓先輩。

「照れない照れない。楓お姉さんはいつでもウェルカムだけど」

ウェルカムなんですか——。カレシとかいないんですか。美人なのに。いや、まあ中身的には妥当かも、だけど。

「珠美優です。珠美は名前はないので、優って呼んでください。珠美ってなんか、女の子みたいでしょう？」

小中一環してきた常套句。自己紹介はいつもこれ一本だ。女みたいな名前とバカにされたこともあったが、自己紹介ネタにしておけば、そんな冷やかしもないし。

「うんむ、よろしく。優くん」

「よ、よろしくです、ゆ、優くん」

「明日から開眼させてやろう、ESPに。ということで、よろしく、優」

「ヨロ」

いやに短い唯のよろしくの文句。目を向けると、すでに読書を再

開いている。アンネの日記は読み終わったらしく、違う本だ。何かのハードカバー、煤けた赤黒い表紙と背表紙、古書のような。しかし、俺の自己紹介そんなに詰まらなかったかなあ……。まあ、おもしろくはないけど、さすがに即、そんなことされるとショックだった。

謎が解けた。一晚考えて解けなかった謎が今まさに解明された。そして、この説明劇は、犯人は身内からというミステリーの手垢しかついていない結果だった。

「勝手なことするなよ」

「悪かった。でも、よかつただろ？」

葉桜は二八二八笑いながら、机越しに俺の肩を叩く。それを振り払う。

確かに、結果オーライだけど、俺も持参してたし、入部届け。

なおも葉桜は俺の肩をポンポンやるので、ちよつとイラつと来る。うざいときは殴っていいという話もあるので、とりあえず、鳩尾を殴る。

これくらいで勘弁してやる。うぐぐと呻きを漏らし蹲る葉桜の背を睥睨する。

「ひどいぜ」

「それはおまえ」

「でも、おまえの好みだっただろ。木霊先輩、あと鬼頭先輩も結構いいだろ？」

なぜ、なぜ知っている。おまえは野球部だろう？ と激しい疑問が沸き、疑問は疑問符に変わって踊りだす。少なくとも、葉桜は情報屋ではない。よく、ラブコメに出てくるような。俺との関係性は、実にギャルゲ的のだけだね。

「なんで、知ってるんだ？」

「おまえの好みなら、中学時代から知ってるし」

「そっちじゃねええ！」

「ん？ 心霊研究会のメンツの話か？」

「そつだよ、そつだよ」

「姉貴が友達なんだよ、鬼頭先輩と」

「ちゃんと、楓先輩に友達がいるようで一安心。」

自分を教祖とかいつちゃう人だから、頭おかしいとかキモいとかいわれてやしないかと思っていたのに。加えて、男ならあの顔に騙されそうだけど、葉桜の姉貴だから、ちゃんとした女友達ってことも、さらに安堵できる点かな。

「変な人だったろ？」

「うん」

「まあ、入部届けは五月の頭には鬼頭先輩に渡してたんだけどな」

なるほど、今は五月下旬、しわくつちゃだったのも納得だ。

ということは、俺が部室に近々くることを承知していたわけだ。

だから、あんなに手際よく拉致れたわけか。きつと、リハしてたに違いない。

「おまえが、普段あれだけ幽霊とか言ってるのに入る気なくって、帰宅部ライフに突入しそうだったからさ、ここはダチのためにみたいな。鬼頭先輩も異教徒の宣教師に任命するとか意味の分からないこといって、喜んでたし」

葉桜は宣教師だったようだ。異教徒の宣教師ってことは、異邦人の使徒みたいなポジションだろうか？ 一応、異教徒ってことだから、第三ポチヨムキン教の信徒にカウントはされていないようだが。「凄い喜んでたよ……」

「だろだろ」

「でも、それより、木霊先輩がガチ」

「欲情にストレートだな、今夜のおかずか？」

卑猥なにやけっ面を興味本位という迷惑な感情でデコレートして、

脇腹を手の甲でウリウリしてくる。

「はは、シークレット」

まったく下品なヤツだ。なにせ、こいつはシモ話に目がないのだ。とくに、葉桜家エロDVD書庫にはお世話になっている。一も二もなく性的な意味だけで。

中学時代の苦難を共に過ごした親友との他愛ない会話。高校生になったたはいいけど、まだ五月、部活にも入っていなかった俺は友人が増えるはずもなく、まだ、こいつ以外に親しく話せる相手がいない。

まあ、葉桜は野球部で生来の人当たりのよさと、いい人っぷりが如何なく発揮され、友人は増加中らしい。このまま、友達百人できちゃうぜ、とか。それでも、俺の相手をしてくれる。親友とはこういう存在をいうのだ。

もちろん、葉桜の親友っぷりはこれだけじゃないのだけでも。

キンコン、ガガガ。

入学のときからずっと調子の悪い教室のスピーカーからノイズ塗れに垂れ流されるチャイム。最初は金ないのかよ、私立なのに、と思ったものだが、人間慣れる。ついでに、パブロフの犬みたいなもので、移動教室などで真つ当なチャイムを聞いても授業に臨む態度に思考や動作がシフトできないから不思議。

しばらくして、教室の黒板側、つまり前方のドアが開く。

担任、長谷川<sup>はせがわ</sup>が入ってくる。

長谷川はめんどうそうに、生徒名簿を抱えて教壇につく。今日も退屈な朝のHRが始まった。しかし、これもパブロフの犬で、これがないと一日の学校生活が始まった気がしない。

でも、退屈なものは退屈で、それはヒマであり、つまり、眠いものは眠い。という等式が成立する。首が天板に付きそうに――。

「珠美、レイケンはいったんだってな」

え？ 長谷川先生、HRでいいですか？ もっと、個人的な場所で話しましょうよ。

長谷川先生は男なので、放課後の特別授業とかは全力で勘弁ですけどね。

「あそこは、色々問題あったからなあ。ま、がんばれ」

問題ってなんですか。メンツが問題ってことなら、納得。

きつと、まだ、一年生なのでクラスメイトは何いってるの？ 先生って感じたが、恐らく、在校生には有名なんだろう。

でも、入ったものはしょうがない、というか、下半身的要請だから、逆らえないし。

## 二章

二

部活初日。

何をどう活動すればいいのか？ という疑問はいつてから気にすれればいい。

なにせ、帰宅部でなくなっただ。

ちよつとルンルンです。

いや、まあ、ルンルンの源は木霊先輩なんですけどね。スキップ気味に部室の戸を開ける。

「おお、いい所に来た、優くん」

扉を開けるなり、飛び込んでくる楓先輩の声。

そして、続くジャラジャラという音。

ん。ジャラジャラの音源を見やる。

緑の背、白い裏面、親指人差し指で握れる小さな四角形。

麻雀牌。

ちよつと待つてくださいよ、ここレイケンですよ？

「さすがに、ふたり麻雀はどうかなあって」

「脱衣なしだしさ」

楓先輩と井塚先輩が口々にいう。

「又野さんは？」

「読書みたいだけど」

確かに、部室の端っこで熱心に何かを読んでいる。

今日は雑誌らしく、ペラペラの紙が開け放しの窓からそよぐ微風に揺れている。

「ってことでサンマだよ」

「ルール知らないですよ？」

「ええ！ 青少年はゲーセンの脱衣麻雀かエロゲの——」

さも、当然に如くいう楓先輩。うんうんと頷く井塚先輩。

俺は人の多いところはあんまり行かない。ゲーセンとかと行ってない。

しかし、そんなことはどうでもいいと謂わんばかりの先輩二名は、腕を掴んでくる。

まるで入部時の拉致の手際を彷彿とさせ、ずるずる引かれて、麻雀卓に誘われる。

よく見ると、なにやらごついテーブルだ。

これが、自動麻雀卓というヤツだろうか。一体、どこから持ってきたというんだろ。まさか、部費で買うとかしないよなあ。

それにしても、木霊先輩がいないんですけど……。

文句をいおうとするも、有無をいわさず、説明を始める楓先輩。

「ほいじゃ、説明しよう」

ノリノリだ。

この人はいつもこうなのだろうか。

「とりあえず、同じのを揃えればいいから。ほら、んで、揃ったら、ロソっていえばいいから。はい、これ役のリスト」

凄、凄まじい簡単な説明。これじゃ、オセロのルールすら説明しないのではないか？ と考える短すぎるフレーズ。

すいません。全く分かりません。

そして、始まる麻雀。

「ツバメ返しを見せてあげよう」

意味不なことをいう楓先輩。

そして、井塚先輩といえば、

「透視できる俺に勝てるものか」

ばっちり、ESPを使用する気満々らしい。

「ああ、もう、早く、早く」

手馴れているふたりは、さっさと両の小指で挟んで積み込みを完了している。

俺はといえば、一個一個積んでいる。だって、できないし、そん

なこと。

最初のターン。

東西南北が並ぶ。あと一とか九とか、そして、なんか模様とか真つ白なのとか。

あの、一個も揃ってないんですけど……。

「ふふ、いい手がきたね」

ニヤリと不敵に笑う井塚先輩、どこがいい手なのか。これじゃ、みつつづつ揃えるのも至難ではないか。

しかたなく、白いのが役に立たなそうなので捨てる。

「ポン」

楓先輩のポン。

そして、ポンだとか、キタだとかいいながらゲームは進む。

「次でアガリだな」

さすが、エスパー先を読んでいる。そして、井塚先輩は、高らかに「リーチ」と宣言し、点棒を卓上に差し出す。手牌からは發と書かれた牌を捨てた。

楓先輩の顔がやったぜ、バローと歪む。どこか、捨てた張本人をあざ笑うような、そんないい手なのだろうか？

そういえば、楓先輩はさっき、俺の捨てた白いのと、さらにその後捨てた中をポンしている。

「はいはい、だいさんげん大三元」

楓先輩が牌の列を倒す。

「ええ！」

「ええって明史い、あんたアホじゃないの。普通、捨てないつしょ？」

「待て。これが当たるハズはない。俺の予知ではスルーだったはずだ」

「はいはい。それであんたは何？ 見せて、手牌」

そういつて楓先輩は井塚先輩の手牌を倒す。

「リーのみじゃないの……」

はあと溜息を吐く楓先輩。

「優くんもナイスアシスト」

グッと親指を立てる。

「で、私親だからね、四万八千点カム」

あれ。そんな高得点なの？ たしか持ち点って最初二万五千点だったような。これでゲームエンド？

「そういえば、優くんは？」

「全然です」

ふうんと井塚先輩の点棒を根こそぎ自分の点棒入れに流し込みながら、楓先輩。

「ほんと、酷いね。最初どうだったの？」

「東西南北と白と中つてのと、あと丸が一個の九個のと、一って数字、九って数字、あとはなんか色々」

「九種九牌もできるじゃない。って国士ねらいなよ！」

「国士って何ですか？」

「ビギナースラックかなあ。もしかたら、ダブロンとか来たかもなの」

専門用語が酷いです。

「あの、木霊先輩は？」

ゲームが最初の開始で決着してしまい、井塚先輩がめげてしまったので続行はナシとなった。脱衣ありで二人麻雀しようと楓先輩は執拗に迫ってきたが、そこは、押しに負けてはいけない。俺には木霊先輩という先約があるのだ。

だから、拒否の限りを尽くし、雑談の空気になったところで切り出した。

「木霊あ？ 木霊は来ないことも多いよ」

ええええ！ 声になる俺の驚き。

「私じゃ不満？」

えっと、科を作らないでください。とっても、とってもわざわざらしい。

「なんで、来ないんですか？」

「んう。ま、そんなことは置いて  
置いてくんだ。やはり。」

「なんで、昼来なかったの？」

「え？」

「昼休みですか？ 何か活動でも？」

「あー、皆でお昼しようか、ってだけなんだけど。クラスに親しい  
人いるならいいんだけど」

「いえ、そんなには」

「昼には木霊も来ること多いからさ。ほら、幽霊談義でも」

おお、その理由ならすばらしく頷くしかないです。

俺は全力で首肯するしかない。

「よかった。よかった。じゃあ、明日から来てね」

いつて、楓先輩はウインクする。

放課後は来ないことが多くても昼くるなら全然OK過ぎというか、  
クラスには一応葉桜がいるけど、あいつは友人多いから問題ないし。

「で、何もしないんですか？」

「何が？」

「活動ですよ」

「うんむ。しない」

断言する。

「てかね、雑談が活動みたいなもんよ」

「でも、あのふたりは……」

横目でみやる先のふたり。

仲良くひとつの雑誌を見ている。さきほどから又野さんが読んで  
いたものだ。

雑誌名はムーらしい。

「あれ何の雑誌ですか？」

「優くん嫌いなオカルト雑誌。私も興味ないかな」  
やれやれと肩をすくめていう。

「超常現象ね！」

そこに突っ込みを入れるというか、文句をつける井塚先輩。ちゃんと聞いているらしい、何て地獄耳。表情だけみれば、読書に真剣そのものなのに。耳と目がマルチタスクな人なのだろう。ちなみに、俺はシングルタスク。

何かに熱中すると他のことは軒並みおろそかになるタイプ。

だから、気付かなかった。

木霊さんが入って来ていたことに。

「こんにちは、珠美くん」

呼ばれてはつと振り向く。

優と呼んでくれていったのに、ということはどうでもいい。きのうは、優くんと呼んでくれたけど、なんか、いい難そうだったし。下の名前で呼ぶことに慣れていないのかも。内気そうというか、大和撫子っぽいし。

「こんにちは」

「んじゃ、私は去ろうかなあ」

遠くからデバガメする気らしい。させるか。

「三人で話しましょう」

ふたりで話すのもいいけど、まだ、話の糸口がないというか。

「うんむ。いいけどねえ」

ニヤニヤしつつ楓先輩。

「じゃ、きのうの話しましょうよ」

「きのう？」

「ああ、トイレでって話？」

「そうです、それ」

「えっと、あれはですね……」

トイレで出た。それは、幽霊ではなかった。

木霊先輩はゴツキーを見たとか。残念。

でも、話の糸口は見えたというか、その後、新入生なので、秋風学園にまつわる、いわゆる、各学校の怪談話の話題でその日の部活

は暮れて行つた。  
楽しかった。

なので、明日は昼も来ようと思った。

完全に俺は馴染んだ。

同化した。

同化したということは裏を返すと、最初から類は友を呼ぶ的状态にあつたともいえる。

放課後は、ESP実験という話で、五芒星<sup>ごぼうせい</sup>や六芒星の描かれたカードを目隠しして当てるといふヤツをやらされたり、初日のように麻雀につき合わされたりした。

たまに、ESP実験のとき、使われるカードがタロットだったりしたのは、恐らく、楓先輩の何かの陰謀で、ESP実験カードそのものにも、七芒星や八芒星が登場したり、数えるのも面倒なくらいの七十芒星が登場したときは、ユダヤの陰謀とアメリカ国防総省の暗躍を暗に感じた。

六芒星といえば、ユダヤの星マーク。

ペンタゴンといえば五芒星。

五芒星といえば、陰陽師？

きつと、深い意味があるのだろう。

とか、こんな考え方をすること自体、俺自身の馴染みつぷりを証明する絶対的証拠ではないか。

さて、ここで木霊先輩について少し。

それは、木霊先輩も入れて四人麻雀に励んでいたときの話。

彼女は既に在籍二年目のはずで、楓先輩や井塚先輩に鍛えられているはずなのに、ゴロンを繰返した。

ちよつと、御幣がある。

ゴロンとは、誤ロンであり、ゴロンなのだ。

四人麻雀といえば、賭け麻雀だ。

最早、俺自身の常識はそうに変質してしまったのだけれど、点一てんいちでのゲーム、社会人にとっては痛くも痒くもないレートだが、月の小遣いが一万貰えれば上々の高校生諸君にとって、点一でも敗北は財布にクリティカル、とくにハコったときなんて最悪だ。

つまり、何がいたいのか？ といえば、彼女は誤ロンした後に、ゴロンするのである。

「今月の小遣いがあ」

といって、パイプ椅子から落っこちて、床にゴロン。そういうことだ。

なんて、愛くるしい。とか、いつも思うけれど、楓先輩は酷薄で「早く、起き上がる！ じゃないと、ポアします」と十八番のポアで木霊先輩を脅す。

一体、全体、いくら木霊先輩から巻き上げているんだろう。

そして、「ポアします」といわれたら、「ポアされる」わけにはいかないの、木霊先輩は健気にも起き上がり、再戦に加わる。

で、やっぱり、チョンボを繰り出す。

一番、驚愕したのは、対面たいめんからチーしようとしたこと。ルール覚えてくださいよ。

でも、その後の泣きっ面が愛らしいのでいいけれどね。

ああ、段々、楓先輩のせいでSになってゆく。どこか、歯痒い。でも、快感。

あれ、毒されすぎじゃん。

けれど、木霊先輩のゴロンはそうそう見る機会はない。ちよっと残念、いや、かなり残念だけど。

初日に楓先輩のいった通り、放課後は余り部室に來ない。だから、放課後には会えないことが多い。それに、昼休みの短い時間では、中々、半荘はんちやん終えるのも難しい。

けれど、昼にはピンク地に白い兎の刺繍が入った弁当箱を提げて、

毎日やって来る。うん、だからね、昼休みは毎日部室に赴く。

もちろん、放課後も行くんだけど。

そして、今日もこうして昼休みに皆で昼食するために、一同会しているわけで――。

「タコさん、ウィンナー可愛いですね」

木霊先輩は、楓先輩の弁当箱を覗きながら、合成着色料全力全快のいまどき、珍しい真っ赤なポークビッツ半分サイズのウィンナーを愛しそくに眺める。ポークビッツ――、俺のポークビッツも見て欲しいな、と一瞬思い、いやいや、ポークビッツじゃハズいなあと妄想にブレーキをかける。

危うく、木霊先輩に俺のポークビッツをタコさんウィンナー化させる世迷いごとを脳内サーバーで描いてしまうところだった。危ない。危ない。

「いただきます」

なぜか、楓先輩のタコさんウィンナーを強奪する井塚先輩。

「ちょ、明史い」

焦る楓先輩。

意に介さず、井塚先輩は真っ赤なタコ足――だけど四本しかないんだよね――を口に放り込む。

「不味い」

「タコさんウィンナーに美味い不味いつてあるんですか？」

「切り方が不味い」

「井塚くん、そんなこといったらダメじゃないですか、鬼頭さんのお母さんに失礼ですよ」

真面目に諭そうとする木霊先輩。

そして、なぜか、無言の楓先輩。

やや、頬が赤い。チーク掛かってる感じ。

「わ、私がつったんだけど」

むっとして、いう。

「え、本当？ 凄いですね」

手放しに褒める木霊先輩を尻目に、楓先輩は木霊先輩を見てはいない。見ているのは、井塚先輩、ただひとり。その他はアウオトブ眼中。

「知ってる」

さも当然と井塚先輩。知ってて焚きつける。なんて、確信犯（誤用）。

楓先輩は、むすつとしたまま、井塚先輩を見続け、そして「ポアの準備、唯い」。

さきほどから、一言も口にせず、もくもくと五目飯を頬張っていた又野さんの目が輝く。狂おしいほどの輝き。

「わかりました。準備して来ます」

ついにくるのか、ポア。

自分じゃないから、見ておこう。井塚先輩、これが今生の別れにならないことを祈ります。

又野さんは、準備に消える。

そして、楓先輩は、何事もない平和そうに全てをなかったことにせんと画策する井塚先輩の背後に回り、

クキョー！

変な音。

間接が外されたような……。

隣で井塚先輩が白目を剥いている。落とされたようだ。

しかし、これはまだポアの下準備。

楓先輩はそのまま、気を失っている井塚先輩のブレザーの袖をひつつたくるように掴んで、そのまま、引き摺るようにして部室から消えた。

どうやら、ポアはここではしないらしい。

追いかけようかな。そう思い——、はて、今、部室にいるのは？

俺と木霊先輩のみ。

これは、幸運ではないだろうか？

エジプトはナイルの賜物。

じゃあ、今このシュチュエーションは、変人部員の賜物。  
なんて、粹な計らいだ。例え、他意がなかったにしても、俺は感謝します。

木霊先輩を見る。

やれやれという風で部室を後にした部員たちを見ている。そして、俺の方を向く。

目があった。

照れくさい。

視線のランデブーはほんの一瞬。

視線は再び、離れてしまい――、でもこのチャンスを生かすために、俺は木霊先輩の喜びそうな話題を脳内ライブラリーをひっくり返して探した。

「いると思いますか？」

ん？ と振り向く木霊先輩。ちよつと、話題のセレクト的にまづかったかもしれない。

俺は非科学的ということも含め、幽霊の存在を探している。だけど、木霊先輩はどうなのだろう。

「何がです？」

「幽霊ですよ」

「そうですね。私には必要ですね」

必要。ようするに、主観の問題。幽霊見たり枯れ尾花ってヤツをいいたいのか。

「必要ですか？」

木霊先輩は少し悲しそうに眉毛を下げた。けれど、それも一瞬のこと、何こともなかったように木霊先輩は「和みますから」といった。

百々（とど）のつまりは、抱き枕ないと眠れないとかそういう意味合いに近いのかもしれない。

「和むってどんな感じですか？」

「んう。私たちとは関係ないんだけど、関係あるみたいところかな……」

よく分らない。

「珠美くんはどうなんですか？」

「確かめて見たいんです」

「確かめる？」

「昔は見えてたんです。四六時中ついてもいいくらい、でも、あるときから見えなくなった。本当は非科学的って分かってるんですけど、なんか、哀愁みたいなものですかね」

「四六時中つても凄いですね」

「木霊先輩はどうなんですか？」

「私は――、たまに、かな……」

たまに、かあ。確かに毎日見ていいものじゃない。でも、毎日見たくないものは、もっと違う、もっと近い場所にあったりする。だから、余計に怖かったりする。

「四谷怪談ってあるでしょう？」

木霊先輩は怪談話か、怪談をネタに論じようということなのか。

「はい」

「あれって創作なんですよ」

俺は幽霊スキーと公言しておきつつ、実はメジャー所をよく知らない、しまった。話にあわせるのが……と思っただけ、木霊先輩は気にしていないようで、続ける。

「お岩さんにはちゃんとモデルがいるんです。ですけど、エンタメなんですよ」

「エンタメですか」

「人を楽しませるものですよ」

「和むのと違うんですか？」

「違う。全然違います」

とても強い意志が籠っていた。

普段の木霊先輩には感じられない何か――。

「結局、なんでしょう。そういうの、余り好きじゃないんです。ごめんなさい、よくわからない話して……」

普段より饒舌だった木霊先輩は一人合点してしまつて、俺をほっぽったまま、会話を切ってしまった。

そのせいで、ちょっと気まずい空気が部室に沸き始める。

ああ、何か言わないと――。  
ぶるる。

ケータイの着信音。

俺のじゃない。俺のはデフォルトのアラームじゃないから。

又野さんは持っていないし、楓先輩のはコーランっぽいものの読経だし（多分、第三ポチヨムキンの聖典）、井塚先輩のは宇宙人の鳴き声（どう聞いてもゲーム。ーイ版、赤緑の頃のピカチ。ウ）。

ということは、木霊先輩のだ。部室の奥に部員がまとめて荷物を置いてある場所があるのだが、そこから聞えてくる。

木霊先輩は分かっているはずなのに、自分の荷物と部員の荷物がわらわら折り重なった山を見つめて、動く気配がない。

先輩は天然の気があるから、まさか、白昼夢とか目をあけて寝るとか、そういうアクロバットかな、と思い、

「鳴ってますよ」

先輩の体がビクつと震えた。

凄く、挙動不審。普段からそれなりに、不審だけど、そこには愛嬌がある。でも、今の木霊先輩にはそれがない。

「どうしてんですか？」

聞く。

木霊先輩は手を振って「なんでもない」をジェスチャー表現し、いそいそと自分の鞆に向った。

何なんだろう。

「……もしもし」

「あ、分かってます。はい、はい——。今からですね」  
短い会話。ケータイを閉じる。

横顔に沈鬱さが隠しようもなく覗いている。

凄く、気になる。悩みとかなら、何とかしたいし。

「ごめんなさい、珠美くん。また」

あ、ちよっと待って——。言葉が口腔を抜け出す前に、木霊先輩は走って逃げるように部室を去った。追いかけてようとして、ポアの終了した他の部員と鉢合わせしてしまい、木霊先輩の行方を見失った。

そして、この日以降も、たまに木霊先輩は誰から呼び出され、そのつど、急いで部室を去る。昼休みに掛かってくることも多かった。木霊先輩に聞いてもなんでもないと返されるばかりだった。

楓先輩は、カレシじゃないの、と俺の脳髓を延髄蹴りで昏倒させるような、言葉の暴力で俺を撃沈した。

何の電話——。誰からの電話——、誰もデンプ。

俺の素晴らしい推測は、間違いなく、幽霊からの電話だと主張した。

### 三章

三

六月も中旬になった。

六月の中頃といえ、秋風学園では、春季生徒総会があるらしい。ぶっちゃけ、どうでもいい話です。

そして、六月に入ってしばらくすると、木霊先輩はいつものこととしても、井塚先輩と楓先輩も余り来なくなった。

毎日、来ているのは木霊先輩狙いの俺と、一体何がしたいのか、いまだによくわからない、又野さんだけだ。

木霊先輩が来ない理由は、ようとして知れない。

楓先輩も同じ。

井塚先輩だけは訳がきちんと判明している。

理由——ポアされたから。

ポアとはどうやら、アポのことらしい、逆さ読みだ。

そして、アポとは何かといえば、アホのこと。

どういうことか、といえば、脳味噌をすかつらんにしてしまう恐怖の施術、チングレクトミーもロボトミーも裸足で逃げ出すくらいだ。

アイスピックを鼻から突っ込んで脳味噌ぐりんぐりんするロボトミーのようなことをする必要もないらしいのだが、又野さんのした「準備」が何だったのか、まだ、よく分からない。

そもそも、楓先輩もポアについて教えてくれても、ポアの実践は黙秘するし、又野さんにはいまだに慣れないというか——。

ただひとつ分かること、それは井塚先輩が、全治二週間の痴呆になったことだ。

ああ、恐ろしい。

でも、診療したのはヤブなんではないだろうか。

痴呆は脳の萎縮で起こるはずで、全治二週間とかありえるのか。  
医者じゃないから、詳しいことは不明。

ふう、又野さんと喋るきっかけがないせいで、ひとり脳内アルバムを開いて楽しむしかない――。

悲しいなあ。

読書に耽る又野さんはそれなりに絵になるんだけどなあ。

美術部員だったら、スケッチしたいかもしれない。

「あの、又野さん」

さすがに入部して三週間。このままではまずい。

意を決する。

「何？」

又野さんは振り向かない。全然、こっちなんて見ない。でも、無視とかシカトをするわけじゃないし、いい子だってことは分かっています。

俺が一方的に苦手なだけです。楓先輩とはきちんと会話もしてるし、ネクラってわけでもないし、引っ込み思案なんてものはありえない。なんだろう、端的に言えば、余り話すのを好まない人種ってどこ。

「今日、何読んでるの？」

「戦争論」

また、変なものを……クラウゼヴィッツだったかな、と思いつつもミジンコの汗ほども気取られぬように意識の底に、その思いを沈める。

「おもしろい？」

「古い」

短い回答。

「古い？」

「十九世紀の本だから」

チョイフルって感じじゃないかなあ。けれど、近代戦に絞ると十九世紀で十分古典だといえなくもないなあと思い、

「情報とか解釈が古いの？」

「そんなことはない」

僅かに首を左右に振る。

お、やつと本を見ないでくれるかな。と考えて、慣れない相手との会話は基本的に質疑応答がよいとの基本に沿い、更に質問。

「じゃあ、なんで？」

又野さんが俺の方に面<sup>おもて</sup>を向けて来た。

そして、本を長机に置く。

本格的会話のキャッチボールですよ。プレイボール。と思ったのもつかの間のこと、又野さんは俺を睨んだ。で、いう。

「うざい」

又野さんはパイプ椅子からピンと背筋を伸ばしたまま、立ちあがり、つかつか歩み寄って来て、横から俺の頸動脈に一撃。

しかし、しかしである。はつきりいつてチョップなんて利かないし、少女の細腕にやられるほど安くできてはいない。

俺は不敵な笑みを又野さんに見せつける。

「う……」

俺のあまりの不敵っぷりに、怯みつつも、又野さんは俺の後ろに回る。

今度は何かな？

又野さんは背が低い。だけど、今、俺は椅子に座っている。

このとき、このことに早く気付けばよかった。立っていれば、食らわなかったのに――。

――クキヨ。

あれ、これってこの前、楓先輩がやってた落とし方――。

瞬時に、意識が遠のく……。白い靄<sup>もや</sup>が視界に入り、脳味噌と視神経が實際繋がっているんだなあと本能的に分かってしまう感覚。

ああ、ママン。窓から見える春の夕日が眩しいです。

落とされていく俺。

調教してやがったな、レイケン部の総統閣下め……。いや、教祖さ

まか……。楓先輩を腐す。意味はないけど、心の中でくらい、腐してもいいじゃないか。

「勝利」

又野さんは耳元で呟く。耳朶みみたぶを息がほんのりと掠める。

さらに、続けていう。

「負け犬は死ね」

毒。デッドリーなボディに、マインド的にもデッドリーなことをいうなんて、ああ、なんて酷い仕打ちだろう。

そして、俺の最期、その眼まなこに映ったのは戦争論のページ。

——血を厭いとうものはそれを厭いとわぬものに制せらる——

「ああ、疲れた」

井塚先輩は部屋に姿を見せるなり、ぼやいた。

見れば、カッターシャツの襟はヨレヨレで、髪の毛はボッサボサ、口からは高橋名人もびっくりな連射溜息。いや、まあ、これはこれで余計に疲れそうな嘆息だなあと思いつつ、非常にかまって欲しうなので、「何があつたんです？」と問う。

又野さんは相も変わらず本以外眼中にないので、「待つてました」とばかりに、俺の言葉に食らいつくダボハゼ気味の井塚先輩。

それにしても、ここ最近の又野さんとの時間はきつかったなあ。

井塚先輩は一応、出来損ないのイケメンだけあって、気さくなのである意味、このどんより空気（又野さんのせいです）をブロークンしてくれるメシア、淀みきつた雰囲気を一手に背負い、ゴルゴダの丘に登るクライスト、イエズス。ああ、何か後光が見えるよ。仏陀みたい。

「それがよお、生徒総会あるだろう」

畳まれたパイプ椅子を広げながら、井塚先輩はいった。

「生徒会のメンツなんですか」

メンツとかいってしまっ、麻雀の毒に犯されきった俺に少し、嫌悪感。

「いやあ。俺じゃないよ、手伝いなんだ」

適当が売りのような性格（ESPに関することは熱心）なのに殊勝なところもあるんだな、と見直す。

「退院したてなのに大変ですね」

「ホントだよ、楓のヤロー」

部室の天井を見ながら、チートしたことがバレた高橋名人のような表情を浮かべる。

「お疲れ様です」

いまさらながらに、ねぎらう。

「それでさ、息抜きしようと思うんだよ」

「息抜きですか？」

「うん。そういえば、優は結構才能あつたしなあ」

才能？ 何のことだろう。身の覚えがないなあ。

というか、レイケンを褒めるのが趣味の人が多いのだろうか。楓先輩のイケメン発言といい。ほだす気なのか、純粹にいつてるのか――。

「才能、ですか？」

「この前、ESPカードやっただろう」

ESP実験と称され、部活に入ってすぐの頃、やらされたヤツだ。色々な絵柄のカードを当てるといって、ゲームみたいな実験。

「お前にも透視能力があると思うんだ」

「えっと……」

言葉に詰まらざるを得ない。

あんなんで、エスパーが分かるのだろうか……。エル・○サド通信でもやってたなあと思いつ返す。

しかし、あれは中々苦痛だった。

実験がきちんと成立するためには、百回は試行しないといけない

とかナントカで、ひたすら、やらされたし。

それに、あれは――。

「お前にはサイキック・シャッフルの才能もありそうだしなあ」

そうです。そこ。

実はあのと時の実験、カードをシャッフルしたのは楓先輩だったんだ。

マジックでは、フォールス・シャッフルというテクニクがあって、手札を切ったように見せかけ、その実、切っていないというものがある。

井塚先輩は、第三者であるからいいとかなんとかいっていたのだけれど……。

それで、どうして、フォールス・シャッフルを楓先輩がしたのかというと、俺に渡された紙にはあらかじめ、答えが書いてあった。誰が書いたのか。楓先輩以外、誰がいるというのか。

ペンタゴンやヘキサゴンはいいとして、七十芒星は分からないって、普通。だからこそ、井塚先輩オリジナルのESPカードは実利と実用があるというのが、本人の言なのだが。

だから、つまり、俺は全く何もしていないわけで、だから、百回の試行が激しい苦難だった訳で――。

「PSIだよ、PSI。うん」

俺は何も答えず、考えにふけているというのに、ひとりで納得しても困る。

それと、PSIって、インコ真理教のパーフェクト・サーバイション・イニシエーションのことかな、まさかね、まさかね、そんなことないよね？

「だから、女子更衣室へいかないか？」

「はい？」

どういつ脳内プロセスを経ての出力ですか、それは。

息抜き……ですか。

ダメです、ダメダメ。俺には木霊先輩とやるまで、綺麗なままい

るんですから。

といおうとして、

「まあ、でも今は運動部も着替え終わってるしなあ、明日にしよう」  
残念そうにいう。

よかった。助かった。

とりあえず、心の純潔が穢れる瞬間は先に延ばされた。

「はあ……」

「でだ、今日は確認しておこうか、戦線を共にする戦士がまさか、  
実はノーマルであれば偶然だったでは、困る」

困るのは俺です。

この前のは偶然ですからなく、楓先輩の陰謀です。

井塚先輩は自分の学生鞆——いつも入れてるらしい——からES  
Pカードを取り出す。

「新作なんだぜ」

自慢げに笑う。

「そうですか」

「唯、シャッフルして」

「いや」

いいよ。又野さん、そのまま拒否って。

「唯、ムー貸さないぞ」

又野さんの背筋がピキッと震えた。

ムーは井塚先輩の所有物だったらしい。

「困ります」

又野さんは井塚先輩の方を向く。

やばいぞ、やばい。懐柔される！

「アズも今度貸すからさ」

アズって何だ。アズって！

又野さんが悩ましい顔をしている。普段、あまり起伏のない顔色  
が明らかに逡巡している。

アズが何か分からないけれど、間違いなく、『本』の類に違いな

い。

「アズ……」

又野さん、悩む。悩む、悩む。眉毛がヒクヒクして、口元はモゴモゴ。ちよつと、可愛いかもしれない……。いや、そんなことはないぞ、断じて。

レイケンが美少女の巣窟だとか、そういう話になってしまつじやないか。男子部員もイケメンの俺に準イケメンの井塚先輩、腐女子も大喜び——ってもっとダメじゃんか。

しかし、こう考えると、このレイケンの設定、どこかで見たことがある気がする。

エスパー、神（嘘らしいけど）、本好き無表情（無口じゃないけど）。SFじゃないから、未来人とか異世界人はないけどね！

「そう、アズだよぉ」

猫なで声にシフトする井塚先輩。

モゴモゴの又野さん。

睨み合い、勝ったのは井塚先輩だった。

ああ、又野さんのバカぁ。

又野さんは新作らしいESPカードをシャフルする。紙代をケチったのか、薄い紙で、切り難いのか又野さんは何回か詰まりながら、カードの束を切った。

その手付きを心配そうに井塚先輩は見つめながら、「折らないでくれよ」と注意する。

そして、シャッフル終了したカード束が井塚先輩の手元に戻り、本日のESP実験は始まった。

が、これはESP実験ではなかった。

カード当てゲームですらなかった。

三歳児でも、そこに描かれた図柄の名前を言葉に出せなくても、そこに何が描いてあるか分かっただろう。

だって、透けて見えるのだから。

市販の物と違って、裏に透けるのを防止するための印刷が施して

あるわけでもない。それに加えて、紙がチャチなんだから、この結果は想像できそうなものの、井塚先輩はとんと気付く気配がない。

鼻歌を歌いながら、俺に紙を渡す。

「絵柄の名前が分からないときは、描いてね」

ウインク。ちよつと、キモイ。いや、果てしなくキモかった。

そして、勿論、俺は全ての絵柄を当ててしまった。

終了後、思い返すと、わざと外すという高等なテクニクを労せばよかったのにと後の祭りシンキング。

全てをいい当てた俺に天真爛漫な笑みを湛えて、井塚先輩はいった。

「すんばらしい」  
と。

俺は人生で初めて犯罪に手を染めんとしていた。

実行犯は二名なのだが、そのうち、ひとりとは常習犯でいまさらといった感じだから、初犯は俺のみ。

「運がよかったな」

井塚先輩はホクホク顔でいう。

一方、俺の心はどんより曇っていた。

「はは、初めてはそんなものだ」

嬉しそうに俺の背中を叩く。

俺の心のうちをこの人は知らない。

初めてことに臨む未通女のようなこの心境を。

俺たちはまさに、このとき、覗きをしようとしていた。  
断ってもよかった。

しかし、しかしである。入部数ヶ月で楓先輩のクキョと首の間接

と血流をとめる秘儀を体得している又野さんを見ると、井塚先輩もクキヨを使えるのではないか、と思えてくる。だから、逆らわないのだ。

どうして、楓先輩が俺に伝授してくれないのかは深い謎なのだけ  
れど。

「運がよかった」  
運――。

さっきから、何度も「運が運が」と井塚先輩はいつているが、はたして何が運がいいのか。こっちは、授業をサボらされたんだぞ。運なんか、これっぽちもついてない。我が家はウォッシュレットだから、おシリもキレイ。

私は足を洗った、君もこれでケツを洗おうというレベルで、キレイだ。

だから、犯罪に手が染まる前に足――じゃなくて、手を洗――でもなくて、俺の純潔を汚さないでください。マジで。

人生初めての授業エスケープ。

満面の笑顔でアシストまでしてくれた葉桜も葉桜だ。どうして、止めない。

「もう、そんな関係になったか」

とか、親が子の成長を喜ぶ顔をするなどといってやりたい。  
が、今はそれどころではないのだ。

これから、始まるのはNOZ OKI。

猛りきつて限界質量に達した、青春の魂が臨界して発症する、B

YO UKI。

先輩、あなたは病気です、それはもう、定説です。

セオリーです、万物理論って名づけます。グレッジ・イーガンもびつくりこいて、ぎっくり腰確定だぜ。

四つの力が、大統合理論や超ひも理論でひとつの真理に向つくりの絶対的、宇宙レベルの、つまり、ギャラクティカな真実です。  
譲りません。

だから、手を引っ張らないで。

そして、女子更衣室の前。

黄色い声がドア越しとドアの隙間をぬって耳に届く。

「おおう、大きくなっただねえ」

「きついなだあ」

「うわ、ぼつさばさ。手入れしてるの？」

とかいう声がある。

ああ、鼻血でそう。ブサイク同士の会話かもだけど。

さっそく、作業に取り掛かる井塚先輩。

ドアに耳を押し当てようと、ドアに接近する。

時間を稼がなくては。

「運がよかたって、何がですか？」

「合同体育なんだよ」

「え？」

秋風学園は各学年、学級数は六つで、二クラスずつ体育の授業がある。合同なのは普通だ。

「ああ、一年だから知らないか」

「はい」

「二年と三年が合同でやるんだ」

耳を離して俺にいう。時間は稼げそうだ。授業時間五十分は無理でも……。

「メリットは何ですか？」

「知らん。校長が熱血体育教師だったらしくてなあ」

しっかし、先輩、声がでかい。

バレますって！ 授業中だから、廊下に生徒はいないし、先生も授業に出かけてるからそのあたりは安心だけどね。でも、ドア一枚隔てたそこは、肌色のパラダイスなんですよ？

人差し指で、広く人口に膾炙したジェスチャー！

これなら、アホでも分かるし。って、入部の日みたいに、心を読んでください！ 読心術！

俺の心の声を聞いて、一段声量を抑え、先輩は続きを話す。

「先輩が後輩を指導する、だったかなあ。全く、それって、生徒指導以外にちつとも役目もなく数ばっか、クソ多い体育教師からさらに仕事奪ってる気がするんだけどな。怠惰だよ、ほんと」

授業サボって覗きに來てる人の言葉じゃない。

「でも、それがどうして運がいいことに？」

「サボってもバレないってこと。数多いし、教師やる気ないし」  
そういうことか。

つまり、先輩も体育だったんですね……。

「お前、霧島永世って知ってるか？」

「知りません」

「新入生は知らんか」

「はい」

「こいつが、トンデモな三年生でねえ。下級生を合同体育でしごくんだよ。俺もしごかれてさ、マジ、しごきってかイジメ？ マジやっつてられん」

はあとややテンションがさがったように溜息をつく。

サボった理由はそれか……。

確かに、イジメなら同意せざるを得ません。はい。定説です。

「それじゃ、覗くか」

先輩は今度は目をドアに押し当てた。

「おおおおお」

何やら興奮しているご様子。絶対、見えてないのに。見ているのは、夢か幻か、脳内妄想で視神経を経由していない情報化と存じ上げます、先輩。

そして、一向に動かない俺に業を煮やしたのか、

「早く来い」

しかたないので、耳だけつける。

和む。あれ——なんて和むのだろう。

女生徒の嬌声なんか聞いてもつまらないはず、いくら、思春期と

いつでも好みの女以外そうそう興奮できないはず。隣の先輩みたく、なんでもござれのウエルカムの方が思春期らしいのだろうか？

そう、思ったとき、和んでいた理由が分かった。

更衣室の中には木霊先輩がいたのだ。

何も透視で見えたわけじゃない。

木霊先輩の声を聞いたからだ。

それも他の声に混じっているような感じではなく、一際大きな声

——叫びだったからだ。悲鳴といってもいいかもしれない。

「きゃああ」と乙女らしい純な声を俺の鼓膜は聞いた。

そして、それが悲鳴なんだと分かった瞬間、体が動いた。

俺は意識が気付いたときには、女子更衣室に侵入してしまっていた。

視線が針か錐になって、俺を攻め立てた。針のムシ口とはこのことだ。

加えて、口から口角泡を飛ばし、罵詈雑言が飛び出している。「変態」だとか、なんだとか。

でも、今、そういうことはどうでもいいことで、耳に聞えていいても目に映っていても、無音と一緒に、いないのと一緒に。俺は木霊先輩の袂へ向った。

ひとりの女生徒が蹲る木霊先輩に付き添うように背中を押さえている。

木霊先輩は今にも嘔吐しそうな面持ちで床を眺めている。

「出た……」

そう、彼女はいった。

訝るように介助している女子も木霊先輩を覗き込んだ。

誰かが、「またかよ」という。

つられるように、「キモ」と誰かがいった。

闖入者は俺であり、この場合、俺が糾弾されてしかるべきなのに、「出た……」というたったひとつの呟きが、俺への非難の矛先を、

木霊先輩への侮蔑へとシフトしてしまった。

口々に皆がいう。

名も知らぬ、女生徒たちがいう。

なんで、そんなことをいう？

あのときみたいだ。平気な顔して、そういうことをいうんだ。

いいじゃないか、何を見たって。

「いいだろう！」

俺は咆哮した。

せずにはいれなかった。

いたたまれないこの腐りきった更衣室の空気を一掃してしまいたかった。

けれど、俺の声がいくら室内にエコーを刻んでも、隣の女生徒にうるさいという顔をさせても、彼女たちの嘲笑の波を押し戻すことはかなわなかった。

俺と木霊先輩が十把ひとからげにされただけ。

「キモ」

また、誰かがいう。

決して、バレぬように、仲間にはばれてもいいが、あざわらう相手にはバレないように、不特定多数にまみれて、身を隠す卑怯者たち。

「お友達ですか？」

介助している女子がいう。

頷く。

彼女もいまこの室内の空気がイヤらしく、はやく俺に出て行って欲しそうだ。

「また、見たらしいです」

おかしい。幽霊を見たのか。

木霊先輩は『和む』といってなかっただろうか？

「私が保健室につれていきますから、木霊さんが心配だったのでしよう？」

よくわかつている人だった。

やや、怒気がクールダウンしていく。

木霊先輩はふるふる震えている。

かわいそうよりも、いいしれぬ不安が鎌首をもたげる。

「はやく、出てけよ、木霊もお前も」

リーダー格らしい女がいう。

「ああ、出てくよ」

介助の女子にまかせることにした。

俺は吐き捨てるように、リーダー格にいった。

「幽霊女と末永くな！」

俺の背にいう。あざけりと、シニカルさ満点の言葉だ。無性にハラが立つ。

けれども、俺はこういつてやった。

「勿論だ」

そして、更衣室を出たところで俺は羽交い絞めにされた。

井塚先輩が俺の手足を固定している。

あれ、なんで？

「おい、何があつた！」

誰か知らないが、先生の声。騒ぎを通報した誰かがいる。

全員が俺と木霊先輩を笑っていたわけじゃないということ、当たり前だが。

「覗きです！」

女生徒のひとりがいう。

相も変わらず俺を空中で固定している井塚先輩に囁く。

「裏切りですか？」

「すまん、さすがにここまで大胆不敵とは思わなかった」

確かに、普通思わない。

井塚先輩が裏切ったのではなく、この場合、裏切ったのは俺だ。そもそも、透視で覗きする予定だったはずなのだし。

「全く、どのどいつだ？ ん、珠美じゃないか」

この声は、長谷川先生じゃないか……。

何かと会う機会が多い担任に捕縛されるのは、運がいいのか、悪いのか。

俺の好感度はゼロになりそうな気配だった。

SAN値もゼロになりませんように――。

――

「やってくれたね」

珍しく、というよりは、初めて見た。ホンキでキレている楓先輩を。

普段の怒っている動作は演技だったのかな、と思える。なので、謝る。それに、この場合、非は俺にしかないのだし、レイケン部長だから連帯責任とか食らうかもしれないし。

「すいません」

「謝るなら、木霊のクラスの女子にね」

全くその通りです。つい、出すぎました。本当に。

「全くね、私、忙しいんだよ？ これ以上、レイケンの名前おとさないで」

あれ？ それって、おかしくない？ と疑問。

だって、長谷川もいつてたし、既にレイケンは問題な部活。それに、毎回、覗きに行ってる井塚先輩は？ 今回は確かに、俺を制止しようとしたんだって嘘ついていい逃げていたけど。

怒りが沸く。なんか、理不尽。俺は木霊さんを思っただけで、前に体が動いただけなのに。したことは悪いけど、そんなに怒られるいわれがあるのだろうか？ 少し、考えだけで、それは怒りへの力ンフル剤となる。

「おかしくないですか？」

「どうして？」

目尻をあげて楓先輩。

「井塚先輩はどうなんですか？」

「明史い？ あいつは、どうせ、目をドアか壁に押し当ててるだけ、優くんはどうだったわけ？」

その通り、俺は確かに突撃した。でも、でも――。

正論だけど！

正論だけど、それが正しいと<sup>つべな</sup>肯えない自分の心。

「でも！」

大きな声が自分でもびつくりするくらい、出てしまった。

楓先輩は、怒りの表情を崩さないまま、掌をかざして、俺をなだめる。

「やったものは、やったんだし。なんで、そんなことしたの？ 木霊の下着でも見たかった？」

違う。そんな不純じゃない。不純かもだけど、不純じゃない。

いつもはエロいこと考えているけど、好きな人の悲鳴を聞いたらどうするのかって、それは簡単な答えしかない。

「違う！ 俺は木霊先輩が心配だったんです！」

一瞬にして、楓先輩の顔から怒りの気が消えて行く。凄まじい速さで怒りはどこかに消えてしまい、その後、楓先輩の顔は沈鬱に歪んだ。何かに気付いたような表情。それとも、いわれたくないことをいわれたことへの言葉のなさを呪う感情の発露。どっちかはわからない。

けれども、言葉をなくして、俺の言葉に楓先輩は答えなかった。

「ごめんね」

なぜか、楓先輩は謝った。

「え？」

「ごめん、ホントにごめん。私――」

しおらしい。怒りの次に見た、先輩の意外な顔。なんでだろう、なんで、そんな表情をするのだろう。なぜ、俺に謝罪するのだろう。「私からいっておくよ、先生とか――」

「えっと……」

「木霊のクラスにも知り合いいるからさ」

そして、笑った。けれど、そこには悲哀の感情しか見受けられない。

「なんで、謝るんですか？」

謝られると、こっちが悪い気がする。

全面的に俺が悪だけど、今回の場合。でも、覗きの件に加えて、これじゃあ、俺が楓先輩にこんな悲しい表情をさせているみたいで我慢できない。

「それは、おいておこう、ね？」

いつもの口癖、おいておこうを繰り返す楓先輩。

でも、俺は問いただす。木霊先輩が関係しているかもしれないと思ったから。

「木霊先輩が何かあるんですか？」

「何もないよ。幽霊見たただだよ」

幽霊。本当にあの部屋にいたのだろうか。

見たのは木霊さんだけ。

昔、幽霊をよく見た俺にも見えなかった。

「幽霊のせいにするんですか？」

「うん。そうしよう、ね？」

楓先輩らしくない発言。何かひっかかる。

幽霊なんていない。いや、俺は見たことがあるから、いるのかもしれないけど。

でも――。

木霊先輩は幽霊を見たことをクラスメイトにバカにされていたし、幽霊に責任転嫁なんてできない。少なくとも、俺がこの目で確認しないかぎり。

「幽霊なんているんですか？」

「幽霊マニアらしくないセリフだね？」

「見てないものは信じません。見たなら、いまさら、アダムスキー

型UFOが飛んでいても、信じます」

「だったら——」

「だったら、何ですか？」

「確認したらいいよ、木霊と」

それはいい提案だと思う。でも、話を逸らされたとは思えない。確かめてみよう、木霊先輩と。

だけど、その前に、楓先輩をもっと問い詰めないといけない気がする。

「何で、話を逸らすんですか」

「逸らしてないよ——」

ポアします、といわれるか、破門をいい渡されるかと一瞬思った。でも、先輩はいわなかった。

「幽霊のことが分かるなら、木霊のこともわかるはずだよ。だからね、今回はこれでお開きにしよう。優くんが停学にならないように、働きかけるから」

取引のようなものだった。

俺の停学をどうにかできるのか？ それは疑問だったけれど。

「じゃあ、木霊先輩と幽霊探しをします。もし、いなかったら、木霊先輩のことと今回どうして謝ったのか、教えてください」

きつい方だったのか、楓先輩は、少し、ビクッと背を揺らした。いい過ぎた気もした。

「うんむ、そうして。いなかったら、教えるから。それと、優くん私がいかな意味不なこというからって、邪険にしないでね？」

やっぱり、いい過ぎだったみたいだった。楓先輩は自分が嫌われたと思ったらしい。

俺は別に楓先輩を嫌ってはない。今回ののはぐらかされたような態度が気にいらないだけ。そして、いなかったら、教えると俺にいった。

だから、取引は完了だ。

俺に楓先輩を嫌う理由はない。

それに、楓先輩はムードメーカーだ。失いたくはないし、陰悪になりたくない。

だから、いう。

「嫌いませんよ。意味不なのは、いつもじゃないですか」  
笑う。

楓先輩は、嫌われていないと分かって、少しだけ嬉しそうに「ありがとう」といった。

――

ケータイが鳴った。

木霊先輩のだ。

本当に、よく鳴る。

部活に来ても途中でいなくなる。この憎々しいコールめ。

「それじゃ、私――」

いつものことなので、ほとんどスルーになりつつあるのだが、今日はいい忘れたことがあった。

「ちよつとまってください」

「はい？」

「今夜、いいですか？」

「ほへ？」

意味を取り違えて、頬を桜色からりんご色に変える木霊先輩。違います。そんな、大胆不敵じゃない。

「この前、見たっていったじゃないですか？」

「あ、うん」

まだ、赤々している。イイネ。

「それで、俺と探しません？」

「愛の行方ですか？」

ぶっふ。俺は噴出してしまった。なぜ、そう来る？

「それは、ちょっと……」  
うつむく。

うつむきたいのはこっちです。

「違います。幽霊探しですよ」

「あ、うん、それならいいですよ」

よし、快諾された。

「いつ、用事終わります？」

「どうかなあ、ダメだったらメールします」

そういつて、メアドを俺に渡す。

そういえば、メアド知らなかったんだなあと思つ。又野さんの知らないけどね――。

「じゃ、部室で待ってます」

「門、七時には閉まるよ」

楓先輩がいう。

「それに、俺の念動実験も六時半で終わるぞ」

そんなのはどうでもいいです。

今は四時半じゃないですか。

放課後になって、まだ半時間ですよ？

半時間で消えちゃうんですよ？ 愛しの――。

とか考えている間に、木霊先輩は消えた。

反動で押し戻された引き戸の狭間から乾いた空気が入ってきた。

なんか、イラつくので、ぴたりと閉め直す。確約はできなかったけど、伝えたわけだし、イラつく理由はないはずなのだけれど。

「フラグ立てた」

又野さんだった。珍しい。発言するなんて。

「フラグねえ」

感慨深そうな楓先輩。

ちよつと先日のがあつてやや話し辛いのだが、もともとハイテンションな人なので関係はあまりない。

「折らないようにね」

「はい、折りませんよ。勿論じゃないですか」

「フラグにも色々あるから……」

「失恋か？ 楓」

井塚先輩の茶々。

「死ね。明史い、いい加減、破門するぞお」

「それだけは――」

なんで、そんなに破門が怖いのだろう。

ポアを超えるということは――。予想できない。

「色々あるのさあ、フラグ」

ここでいう、フラグはギャルゲーのイベント分岐のポイントとか内部バロメーター、じゃなくてパラメーターのことなんじゃないのかなあと思いつつ。

「人生のフラグですか？」

「そうそう、人生のフラグ」

「俺が覚醒したのは、そうだな……」

昔話を話そうとする井塚先輩。全力でシカトする楓先輩。まったく、端から見ると仲の悪そうな二人だとも思う。

でも、実際は結構お似合いだと、俺は思う。息が合っていると評すべきか。

井塚先輩は、エスパーになった契機を語る気だったんだろう。

「――でなあ――」

先輩は話し続けている。

得意げに首を回したり、過度なジェスチャーが入ったり。

楓先輩は、長机に突っ伏して、ヘニヨヘニヨになっている。

又野さんはいつも通り。

で、念動実験はしないんですか？ っていわないほうがいいか。

「そういえば、今日は楓先輩いるんですね」

「ん？ 終わったんだよね」

「そうやって解放された」

井塚先輩、ちゃんとこっちの話も聞いているんですね。

「でなあ……」

話長いなあ……。

寝ちゃったよ、楓先輩。なんか、お疲れっぽいし。

ああ、俺も眠気が――。

どうせ、七時まで暇だし……寝よう。

そう思ったら、一瞬で眠れてしまった。

――

「珠美くん」

背中を叩かれた。甘い声がする。天使の甘美な――。

「おはよう……」

って、あれ。

すっかり、暗くなっている。井塚先輩も楓先輩も、いない。

「あ、木霊先輩」

「やっと、起きてくれましたね」

木霊先輩は微笑む。

でも、ぎこちない。

そして、俺の目は彼女の頬に釘付けになった。

叩かれたような跡。  
はた

どうしたんだろう？

「あの頬、どうしたんです？」

「あ、これ？ こけちゃって……」

「天然ですね」

だが、それがいい。

「何時ですか？」

「六時四十分。校門閉まるね、もうすぐ」

「はい、でも大丈夫です。さあ、行きましょう」

「本当に、探すの？」

困惑した顔。

「はい。正体を見てやるんです」

「そう……」

「木霊先輩を怖がらせたんですから」

これはダンディズムです。定説です。

「でも、あれはね——」

いいかけて、やめる先輩。

「あれは？」

「いい感じに暗いね」

話を逸らされた。

「はい。出そうです。更衣室じゃ昼でしたがけど」

「でも、校門閉まりますよ？」

「だから、大丈夫です。葉桜に聞きましたから」

「葉桜？」

「えっと、俺のダチです。校門閉まってもだから大丈夫です。警備システムにも引っ掛からずに出れます」

「悪友なんですね」

「そうです」

「いいね」

暗がりの窓から、校庭を見ながら木霊先輩はいう。

哀愁が漂っている気がした。

「悪友ですか？」

「そう、いいね」

「楓先輩、十分に悪友じゃないですか」

「そうだね、楓は——」

何かを思い出すように虚空に目を逸らす。

楓？ いつもは、鬼頭さんって呼んでたような気がする。

「悪友じゃないかなあ、やっぱり、そう思います」

「変友ですか？」

「うん。憧れます、そういうの」

何に憧れているのか、判然としない。

「じゃあ、俺と悪友しましょう」

って、ダメじゃん。トモじゃダメじゃん。恋人未満の関係だったの！

「珠美くんと？」

「はい、こうして——」

七時。最後のチャイムが鳴る。

多分、もう生徒は俺らを除いて帰っているし、先生も宿直以外いないだろう。

「校門の閉まった学校にいるじゃないですか」

とりあえず、友達から始めるつても搦め手としていいハズ。

下級生↓部員↓友達。クラスチェンジ、クラスアップのハズ。

「そうですね」

木霊先輩は微笑んだ。

認められた。OK。今のところ順調。

「じゃあ、トイレ回りましょう」

「うん——」

秋風高校には、いくつかトイレがある。

一番出そうなのは、いまだに昭和の臭いを放つ、東校舎のトイレだ。

ボットン式なのでほとんど誰も使わないだろうと思う。

「臭いですね」

「だね」

さすが、ボットン伊達ではない。水洗とは違うのだよ、水洗とは！　ってことか？

「感じます？」

「んうん。いないかなあ」

ハズレ。今夜、当たる保障もないし。

って、待てよ。今日、一回も発見できなかったからって、幽霊がいないことの証明にはならない。しまった。悪魔の証明だ。嵌めら

れた。楓先輩に。

でも、と思い返す。

これが無意味ってことはない。木霊先輩と友好が深まるはずだし。どうしました？ 珠美くん」

ぼうつとしていたのか、声を掛けられた。少し、心配している感じ。幸せです。心配されて。

「あ、大丈夫です」

「次、行こう」

急かすように、木霊先輩。

手を握られた。手――。頬に血液が行くのを感じた。きっと、赤らんでいる。突然、手を繋がれたわけだし。正確には、木霊先輩の手は俺の手首を握っているのだけど。

「あ、はいはい」

足が絡まる。

タバコの吸殻。傾いた視線に映った。山のように積もったシケモク。フィルターの山積。

不良が溜まっているのだろう。人気があまりない、臭いので人がこない場所だからか。全く、クズだなあと思う。二十歳になれば吸えるのに。アルコールと違って、百薬の長って言葉もない、完全な毒物なのに。何をそんなもので、反抗しているフリをするのか？

原意の意味での中二病だろうか？ ま、どうでもいい。

今、重要なのは別のこと。

「感じません」

結局、妖しげな場所は廻った。

何も感じない。との回答が得られた。

「珠美くんはどうですか？」

「んうん。ほんと、見えなくなっただけみたいです。中学のときは見えただんですよ。しょっちゅう」

「環境の変化ですかね――」

そうかもしれない。

「ですね。そうかもしれません」

「私もそうかなって思っんです」

「先輩も？」

「私の場合、前まで見えなかったんですよ。だから、珠美くんとは違って中学のときは、全然、幽霊とか信じてなくて」

「そうだったんですか」

「でも、見ちゃったら。信じるしかないというか――」  
その気持ちは分かる。

非科学的。なのに、自分には見える。その謎。

「珠美くんも、また見えたらいいのに」

期待の籠った眼差しが俺を射抜く。期待されてる？

「努力しますよ」

「うん。ありがとう」

「いえいえ。俺のためですから」

「なんで？」

しまった。和みすぎて、口が滑った。誤魔化さないと。

「一緒に観察したいじゃないですか。幽霊生態調査」

「生き物じゃないですけどね」

くすつと口元に手を当てて、上品に笑う。

「ですね。だったら、何なんでしょう」

「ほんと、何でしょうね……。でも、私を助けてくれることもあるんですよ」

「和むっていったヤツですか？」

「そう。ほら……。一人が寂しいときとかあるでしょう」

「ア……。分かります……」

「よかった。分かってくれて」

「俺も中学のときそんな感じで」

「え？」

木霊先輩は目を見開く。

「そっちは見えませんか……」

どう、見えているのだろう。俺。

「葉桜くらいですから、友達。今もですけど、あ、木霊先輩含めて二人です」

「意外かな」

「意外ですか？」

「ちよつとね」

「そうですか」

「楓についていけてるから、ノリとかいいみたいだし」

「井塚先輩なしじゃ、辛いですよ」

「そうかも——」

また、笑った。

今日、彼女はよく笑った。

なんか嬉しい。

俺だけに見せている笑顔。

本当はそうじゃないはずだけど、そんな妄想を抱いてしまう。青少年なんだ。神だつて、この自意識過剰妄想を許すはず。許して。

「そういえば、何時です？」

木霊先輩は俺に訊く。ケータイ見ればいいのに。でも、頼られてる？ いい傾向。マンセー。つて、さつきも訊かれたからケータイを学生鞆から出すのが億劫なだけかもだけど。

「八時半……」

「結構、経ちましたね」

「すいません。一時間以上も連れまわして」

「いいよ」

「門限とかあつたりします？」

「ないですよ。うち、結構、放任だから」

「あ、うちもです。えつと、送ります」

「いいですよ」

両手を振って遠慮する。いえいえ、ダメです。遠慮はさせません。意地でも送ります。

「でも、もう暗いし」

「見られたら——」

見られて困ると？　そういえば、カレシがどうか？　あれ、マジだったのかなあ。でも、そういう理由なら、でも——懊惱。

「でも、危ないかも。春だし」

「もう六月ですけどね」

突っ込んでくれた。このまま、押そう。ゴリ押しで。

「というわけで、送らせてください」

「んつと……」

迷う。

迷う。

早く。早く。

イエスといってください。

「うん」

気合を込めて、木霊先輩は頷く。

「わかった。送ってもらいます」

「あ、はい。喜んで」

こうして、俺はこの日。カレシがいるかもしれない、すでに唾つきかもしれない、コナかかっているのかもしれない、木霊先輩と一緒に帰ることができた。そして、僥倖にも彼女の家は俺の家に結構近いことも判った。

工程の七割は同じ道。

バス通でもチャリ通でも、電車通でも、バイク通でもなくて、木霊先輩も徒歩通学ということも分かった。

色々なことが分かった気がした。

殆ど、些細でどうでもいいことばっかだけど。

でも、逆にいえば、俺は殆ど木霊先輩のことを通学の方法すらよくしらなかったんだと反省させた。

なんて、愚鈍なんだろうと——。で、夕闇の校舎で俺の隣を歩きながら笑顔を浮かべる彼女を思い返し、この日、困ったことに、中

々、  
眠れない夜だった。

## 四章

### 四

春の生徒総会は始まった。

体育館にぎゅうぎゅうに生徒が押し込められ、今から始まる退屈の二時間へ向けて爆睡モードへ突入しているんだろうなあ、と思つたら、そんなことは全然なく、生徒たちは煌く眼で体育館の舞台袖を見ている。

今から執り行われるのは演劇じゃないぞ。と思うのだが、俺にはその理由が分かっている。というか、さっき分かった。

生徒総会なのだから、当然、生徒会と一般生徒の問答があるわけである。

一般生徒側は数が多いし、変なヤツもいるかもだが、同じヤツが質問するわけでもない。生徒総会の真のおもしろさは、回答側、生徒会側、つまりは会長が誰かによる。

で、会長は誰か？ それは、我らがレイケンの部長、鬼頭楓であった。

なるほど、これで、先日の停学させないようにとの話があつたわけで、しっかり、停学はなかった。それで、俺は楓先輩に感謝したわけで、確執もない。長谷川から「今回は多めに見る」との言をもらった後、すぐに、感激の泪とともにお礼を述べた。

親バレもしなかったので万々歳だ。我ながら、あのときはやりすぎだと今更思う。

幽霊の件もまだ未解決だしなあ。と、まあ、それはおいておこう。今、俺は困ったことに生徒会書記に任ぜられた。

何故か？ 秋風学園生徒会には書記がいなかったのだ。二名いるはずが、一名もいないなんて不手際はおかしいのじゃないかと、小一時間楓先輩を問い詰めなくなったが、「やらないなら、ポア」と

いわれ、井塚先輩のように二週間廃人生活をしたくないので、了承するしかなかった。

そもそも、書記の仕事なんて高が知れている。で、当然だが足りないのは二名なのでもうひとりとは又野さんが任じられた。

霧島校長が開会の挨拶を始めた。それを舞台袖から出番待ちの役者のように覗く。いくら、議事録つけるだけとはいえ、緊張する。数百人の目の前に出る経験なんてそうそうない。女子更衣室には呐喊できるのに、といわれたら、元も子もないけれど。

校長の挨拶が終わる。長い挨拶だったなあ。

ここ、秋風学園は我が町霧島市一番の進学校だ。さて、どうして校長と市名が同じなのか？ 答えは簡単だ。

霧島市は元々、国立町くにたちという小さな町だった。ある日、そこに銭を持つて現れたのが、霧島一族である。彼らは資産家だったので、あつという間に町民は懐柔されたのはいうまでもない。

しかも、霧島一族は霧島重工の大株主で創業者の一族と来ている。雇用も税金も国立町は霧島氏に頼ることになり、おんぶに抱っこしている間に、代々の町長は霧島の出になり、市に格上げされた際も霧島市になってしまった。MTN財閥と同じく世界の誇る日本企業でもあるわけだし。

あいにく、俺の両親は霧島重工とは全然関係ない職種だが、市民の半分以上は霧島重工のおかげで生きているといってもいい。

そして、本題。つまり、秋風学園は霧島一族が設立し、霧島一族の関係者が関わってくる。校長は、かなり遠縁の霧島さんらしいが、理事長も霧島姓だ。理事長の方は校長ほど遠縁ではないらしい。

だから、何がいいいたいのか？ といえば、遠縁の校長は、一応霧島さんでありながらも、霧島宗家に媚をうるために、こういったイベントごとがあるたびに、霧島重工に言及するのである。なので、ダラダラ長くなる。そういうこと。

「それでは、第……はおいとして」

開会宣言を始める楓先輩。が、一体、第何回か忘れてるご様子。

「春の生徒総会はじまるよ」  
歌った。

体育館の壁際にいる教師陣の顔が一齐に引き攣った。

「それでは、議題がいくつかあるわけですがあ、えっと、じゃんじやんいきましよう」

議題の書かれた原稿を又野さんから受け取る楓先輩。

あれ、前もって確認とかしないの？ ヨーロッパ流？ 日本流の出来レース答弁じゃないの？ 都合悪くなったら、「速記止めて下さい」が常套句の。あれって、卑怯だよ。放送してるのに、何が速記止めて下さいだ！ 速記の意味ないじゃん！ ってここは学校、しかも子供の生徒総会、一緒じゃないか、とクールダウン。熱くなつたぜ。

「東校舎のトイレの改装？ 臭いの？」

生徒たちに聞く楓先輩。議題を提出したらしい生徒が立ち上がる。

「滅相も臭いです」

何か日本語変な人だなあ。

「それは、臭いと思うからよ」

元も子もないことをのたまう。

「臭いものは臭いですよ？」

「じゃあ、なんで香水つけたりしますか？」

「いい匂いだからじゃないんですか？」

「残念」

児。清風である。次は、アタックチャンスか？

「私は臭いと思う。香水、だから、トイレも主観だと思います。主観でものを語らないでください」

主観でものを語ってるのはどう聞いてもあなたです。楓先輩。臭いものは臭いです。

「いまどき、ボットンってどうなんですか？」

「足腰が鍛えられると思いますよ？」

なぜ、そんな挑発的なんですか、楓先輩。よく、生徒会長になれ

ましたね。神頼みですか？

「水洗和式だったら意味ないです！」

「臭いは？ 臭いの話じゃなかったの？ これ、洋式ウォッシュレットでケツ綺麗ってこと？」

「なんですか！ 会長！ 人をおちよくるのもいい加減にしてください」

提起人がいい加減、キレた。

当然だ。普通、キレる。

「うんむ。よろしいです。あなたの熱意を買いました」  
えええ。何それ？

「校長、校長」

校長を手招きする楓先輩。ふてぶてしいなあ。

校長が手招きに応じるはずはなかったが、首を横に振った。

「ああ、校長がボツだといってます」

「ええええ！」

一応、霧島一族がノーというのだから、無理だろう。

「困りましたね。それなら、壊しましょう」

再び、手招き。頷く校長。

「OKです。東校舎のトイレは破壊されます。デストロイです。おしむ人は一回記念にどうぞ？」

「あの会長……。なくなったら」

心配そうな提起人。

「臭いのは我慢できない、しかし、新しいのもつくれない。が、壊すのは予算的にOKということは、こうするしかないでしょう？」

じゃ、議決取ります」

拍手が多い。可決だ。

多少、トイレが遠くなっても、臭いよりはマシということだ。

滅茶苦茶なようできて、落としどころがわかっているというか。

そこそこな手腕に思えた。もっとも、身勝手だが。なんとなく、

これは民衆に阿おもねっているフリをしている独裁者——なるほど、又野

さんの敬愛っぷりの正体はこれか。納得。

そして、そのまま総会は進む。踊ることはないが、茶番。所詮は生徒に権限などない、それをエンタメに仕立て上げているこの人は確信犯的なのか、どうかわからないけれど、会長の意味はあるだと思っ。

「次、最近、幽霊騒ぎが多い、ね。多い？」

確かに、多くはないような。身近であつたのも、一回、木霊先輩が更衣室で――だけだし。

「多いですよ？」

三年生のひとりがたつ。男、背はそれなりに高い。

「私は聞きませんけどねえ」

さっきの挑発とは違って、どこか、嫌味つたらしいというか陰悪な棘を感じる。一応、レイケン部員だから？　なら、喜びそうだけど。

「俺の知り合いがねえ」

男は笑いながらいう。

「はい！」

関係ないところで、手があがる。マイクが手を挙げた生徒に与えられる。

「血を見ました！」

一年生らしい。どつと笑い声。

鼻血じゃねーの、と野次。野次というか、俺もそう思う。木霊先輩も鼻血つてたし。

「ほらなあ」

男子生徒はにやにやしながらいう。壇上ではなく、二年生の方向を見ている。

「名前いおうかあ？」

「いいですよ、そういうのはプライバシーうんたからですね」

「ああ、そう？」

「そうです。で、どうしたいの？」

「いいただけですよ、はは」

ほんと、ヘラヘラしたヤツだなあ。楓先輩とは違うベクトルで人の神経を逆なでするというか。

「そういうくだらないことを提出しないでください」

「へいへい」

楓先輩の厳しい調子にも別に何も反省せず、その三年生は座った。マジで、何だったんだ？ 議題？ おかしい。てか、目を通しておこつよ、楓先輩。

「はい、で、次、おかしい宗教の布教活動するアホがいる？ ああ、これはパスですね」

多分、あなたのことですよ。パスしない、パスしない。

その後も、くだらない議題が続いた。

体育館裏の子猫をどうするのか？ の議題が出て、実はその猫は生物部が解剖実験した後にそのままビニール袋にいて生ゴミとして捨てたと、これまた、どこから仕入れたのか、会長が暴露し、環境保護部と生物部が提起人を巻き込んで論争をし出し、「猫食えないし、時間ないし」で打ち切られ、その後もいくつか議題が出たが、適当に会長に流されていった。

目の前に鍋がある。土鍋だ。中々、年季が入っていて、縁と底が焦げていて、模様もくすんでいる。今まで、この鍋が経験した味が内壁に詰まっている。そう、感じる。

中ではぐつぐつ湯だった真っ赤なスープ、そして氷山の一角のように顔を出す豆腐。邪魔そうに隅に追いやられた白滝。灰汁が取り損ねて上辺に引っ付いている肉、ちなみに豚肉だと思う、ちよつと霜降り過ぎる気もするが。

キムチチゲ。あ、チゲ鍋っていわないこと。チゲってのは朝鮮語で鍋のことだから、鍋鍋って意味だからね、要注意ですよ、皆さん。

つてことよりもだ。なんで、六月にこんな温かい鍋を囲まないといけないのか？

「汗出てきた」

湯気に当てられて楓先輩。

「血の池地獄」

それは大分別府のアレですか？ 又野さん。

「おいしそうですね」

ですよ。

って、つられてはいけない。ちゃんと、常識人の反応を示さない。もう、手遅れかもだけどね。

「なんで、鍋なんですか？」

「打ち上げといったら、鍋だよ。鍋」

「何の打ち上げですか！」

「生徒総会に決まってるじゃない？」

決まってるんだ……。でも、これは一応、勝手に書記にされた俺アンド又野さん、準備に酷使されていた井塚先輩へのねぎらいということなのだろう。うん、たまにはいい人だ。鍋代はどこから出るのか、自動麻雀卓並に謎いけどね。

「でも、なんで屋上なんですか」

そう、ここは屋上。部室ですればいいものを。なぜ、こんな場所で――。

六月とはいえ、結構寒い。総会が終わって、長々続いた環境保護部VS生物部の戦いの所為でかなり規定の時間をオーバーしたから、今は六時。日も傾く時間帯。そら、寒い。

でも、汗っかきなのか、汗をかいている人が約一名……。あれ、約四名に見える。

なぜか？ 皆、すでに食っていた。

「食べないんですか？」

いえ、食べますとも木霊先輩。あなたの肉をハフハフ食う姿を見ながら、食べますとも。

「これ、いい豚だなあ」

「あ、明史い。分かる？　これさあ、理事長の部屋にあった付け届けだったんだけど、拝借してきちゃったんだあ」

お茶目にいう楓先輩。

それ、窃盗ですから。

「なんて、豚なんですか？」

「えっとね、パッケージ捨てちゃったから、味で判断して」

そんなの分かるってどこの海。雄山？

「これ——」

又野さんの眉が反応している。分かるのか？

「黒豚」

すでに肉なのに分かるらしい。読書家にしてグルメ、侮りがたし。

あ、あとネオナチですね。この子。

「ほうほう。白豚ではないと」

「うん。黒い味がする」

黒い味ってなんか、タールの味っていうか、そんなイメージがあるんですけど。タバコは吸ったことないけどさ。

「鹿児島のか？」

「んうん。異国情緒の味がする」

どんな、味だよ！　海を渡って来ただけに塩味とか？

でも、保存用に塩かかってたりするの？　知らんけど。

「ああ、あれだ。アグーっての」

閃いたとばかりに、楓先輩。しかし、首を振る又野さん。

「違うの？」

「だって、沖縄は日本だろ」

「分かってないなあ。明史い。沖縄は異国だよ、異国」

いたくお気に召さなかったようだ。肉を掴みながら、箸を振る。

肉汁が飛んだ。目に入った。滲みる。さすが、キムチ鍋。

「そもそも、沖縄返還のときまでは一応パスपोいったい、尚氏は琉球王であって、藩主じゃないんだし」

笑止？ 人名ですか？ 沖縄史って日本史でも余り習わないし。でも、相変わらず、どうでもいいことに詳しい人だ。

「そもそもだねえ、東アジアの国際秩序的に——」  
いつものエスパー語りの井塚先輩もうざいが、楓先輩もうざいなあ。

でも、今のうちに肉ゲット。あれ、結局、どこ産の何て豚なんだ？ 井塚先輩も喋らせておいて、今のうちに肉を食べつくす算段らしい。同志だ。お互いにアイコンタクト。ホモっ気でも感じたのか、隣で木霊先輩がクスッと笑う。誤解されたかも？ でも、今は肉。最優先事項、肉。美味いし。

「——天皇史観過ぎるんだよ。義光だって——」  
まだ喋ってる。

肉ハフハフ。美味しいなあ。

「——あえて、尚氏しやうしを藩主にしてから、廃藩置県を一步遅らせたのがそもそも——」

もう、何の話をしてるのか分かりません。

でも、肉沢山あるなあ。何グラム入ってたんだろ？

あ、豆腐崩れてる。絹ごしなんか鍋に入れるから……。それに、皆、肉しか見てないし。

「——ウチナーグチを沖縄方言というのはまさしく——」

肉、肉。

「——ウタキってのがあって——」

肉、肉。

「——八丈島——」

なんで、八丈島？ 沖縄の話だったんじゃ……。まあいいや、肉。

「——ワールドウォーで首里城焼いたのは許しがたし！」

締めくくった。誰も聞いてなかったけど。

楓先輩はさて、食うかと鍋を除き——。

肉は既にジエノサイドされました。民族浄化です。

「許しがたし！」

もう一回いった。

「優くんも、唯も木霊も、明史も、薄情だあ。全員、破門してやる」

いわゆる、退行というヤツなのか。ちょっと稚氣に溢れすぎな拳動を示す楓先輩。

「カエデ」

「何よ。唯」

「確保しておいた」

使い捨てのプラ製お椀を捧げ持つ又野さん。  
いつのまに。

「おお、さすが、唯。いい子、いい子。で、この肉、結局、何？」

「イベリコだと思う」

イベリコ？ 何か高そうだなあ。

「ああ、あの生ハムとかのヤツ。百グラム、千円とかするんだよねえ」

高っ！

「でも、それって鍋で食うものなんですか？」

「確かに、もったいない気がします」

「美味けりやOK」

「でも、ソテーとかで食べたかったなあ  
しみじみという。」

「それに、多分、ビエンソじゃないと思う。かなり、値が張る」

「まあいいや、ゴチ、理事長お！」

やや冷えた肉をほお張りながらいった。

「あとね、この白滝、実は春雨」

「どうりで硬いと思ったよ」

「井塚くん、気付いてなかったんですか？」

呆れ顔の木霊先輩。すいません、俺も気付いてなかったです。レタスとキャベツの違いがわからないので――。小松菜とホウレン草の違いなんてもう雲の上ですから！

「それと、実はもうひとつ、失敬してきたのがあるんだ」

「ほんと、何かをコタツ——実は屋上にコタツをもってきて鍋している——の上に置く。」

「どうみても、酒瓶です。一升瓶です。焼酎です。最近ブームの焼酎です。」

「高校生なんだから、もっと健全に酎ハイにしましょうよ。」

「ちよ、楓」

「井塚先輩が嘔飯する。そのまま、字のまま意味で。」

「せめて、酎ハイにしようぜ?」

「なんか、意見の一致が多い。」

「焼酎ハイボールの略なんだから、あれも焼酎入りよ、変わらないって」

「アルコール度数が激しく変わると思うのは俺だけでしょうか?」

「でも、ジンベースじゃないのか?」

「井塚先輩、それ違う」

「又野さんの否定入りしましたあ。」

「ジンはジェニパーベリーの有無。あの漫画じゃ、セットだけど、違う」

「名探偵コロン。」

「ああ、ウォッカなのか」

「そう、蒸留酒だから似たようなものだけど。ウォッカは基本的に洋酒と同じ、麦を使うことが多い。焼酎は米とか芋だし、芋の乙類だった場合——」

「なんでこの部活はこういうふうでもいい蒔蓄を垂れ流す人が多いのか。」

「——ヴォドカは酒の総称で——」

「あのお、皆、白滝改め春雨攻略中。又野さん、帰ってきてください。」

「——白樺の炭で漉さないことと発芽した穀類を使わないことが——」

春雨春雨。

「——だから、焼酎といっても甲類である場合、他のスピッツ——」  
春雨、ちよつとピリカラ。なんとなく、坦々麺っぽい？

「——そもそも、明治期に入るまで——」

甲とか乙とか、説明乙つて感じ？

楓先輩も無視して、注いでる……。

コップが五つ。

ストレートですか——。

あ、氷入れた。

ロツクのようにです。

水で割る気はないようです。

俺、親父と発泡酒しか飲んだことないからなあ……。

「はい、明史い」

手渡しが始まる。しかし、又野さんの説明は続いている。

「——だから、黒糖焼酎が飲みたい」

終わった。

「唯、これ。奄美産だよ？ 銘柄、加那<sup>かな</sup>だつて」

「加那伝説……」

ボソつと呟く、又野さん。

「いいから、飲め。野郎ども！」

宴に酒はこうして、注がれた。

宴は酣<sup>たけなわ</sup>だつた。

黒糖焼酎なるものが、どれほどのアルコール分を含んでいるのかは分からない。だが、ひとついえるのは、間違いなく、俺は酔っている。

証拠をあげよう。

井塚先輩がマジモノのイケメンに見える。以上。

「ひひひ」

笑う人が一名。おっさん臭く笑う。――木霊先輩だ。  
幻滅する？ まさか、俺はばっちこーいですよ。

「ひいいいん」

泣く人一名。楓先輩だ。

摺足で木霊先輩ににじり寄り、彼女の胸に顔を埋めて、すすり泣く。泣き上戸らしい。

「沙子おおん」

「何い？」

「沙子おおん」

「だから、何だよお」

男口調にすっかりなっている木霊先輩は、楓先輩の髪をもみくちやにする。

「大丈夫ううあああん」

号泣し出す。もう、意味が分からない。

「私あ、だいじゃうぶに決まってんだらあ」

ロレッツが完全におかしい。

「ごめあああああん」

謝っているらしい。

「謝るぬあ、ボケええ」

汚い言葉も飛び出す。

ああ、ゾクゾクする。

酒のせい？ 血中アルコールのせい？

はは、違う違う。酒による二面性の裏の発露に萌え萌え中だらあ！  
そんな、いい気分の俺に体を当ててくる人物。

井塚先輩と又野さんだ。

「見えるかあ」

「見えるう！」

こっちは単にテンションがあがっているだけらしい。

やに下がった顔とだらしなく緩んだ顔がひとつづつ、俺に迫る。

「ええい、去れ、去れえ」

お江戸口調になっちまう。

「お前は見えるかぁ！」

「優も見えるのう！」

ふたりして、俺の背中を通り越し、中空を見ている。

出たのか？ それとも、ただ酩酊状態なのでってことか？  
後を見る。

「何もいねえよぉ！」

「いるだろう。ほら、あそこどうあ」

井塚先輩がもうすっかり日の暮れて群青色に染まった空を指す。

「見えるだるう！」

壊れたマリオネットばりの首肯っぷりで又野さん。

「ごめあああああん」

割ってはいるのは楓先輩。

「私のせいだああああああん」

「違いよぉ、このタアアAKO」

ばしばしと、楓先輩を叩くのは木霊先輩。

いつもと立場が真逆というか、普段は意外とこのふたり、会話が  
ないんだよなあ。

「うわあああああん」

「泣くぬあああああ」

「うわあああんんん」

「どう黙れえ」

いい加減、宿直の先生か、見回りの警備員が来るかもなあと他人  
事のように思い、  
びるるるる。

電話のコール。

憎き、コール。  
にく

いつも、これが鳴った後、木霊先輩が部活から去る。

木霊先輩を連れ去る憎<sup>にく</sup>き、コオツオル。  
が、今日は違<sup>ちが</sup>った。

卿が削<sup>く</sup>がれたと不満タラタラの表情プラス挙動で電話を取り、木  
霊先輩は普段なら創造がつかないことを言った。

「うざい。じゃあね」

プチ。

ああ、男らしい。凄く。

「いいんですか？」

「いいのお、いいのお」

そういつて、また、コツプをあおった。

「ミエルウ」

こちらもまだまだご健在。

「七色だなあ」

「いえああ。虹は地方によって見え方ちがうんれすお」

蘊蓄はへべれけでも失わない又野さん。強いなあ。

「だなあ。二次が三次とかいうのと同じらなあ」

「だすだす」

「で、見えないのお」

俺に抱きついてくる。

除けようとするが、井塚先輩も絡まってきて――。

「うつつ、苦しい」

「苦しいのは最初だけらあ」

「そうだあ。目覚めれば大丈夫だあ」

片腕は俺にしがみ付いたまま、ふたりはハイタッチを手だけです  
る。

「いい加減にい――」

クキヨ。

あれ、このパターンは――。

「まだ死ぬなあ」

クキヨ。

さつき、右に倒された首が今度は左に。あれ、俺の意識が戻る。すげえ。アルコール。

「先輩がシネエ」

クキヨ。

お、出来た。

さすが、俺。もう何回も伊達に食らってるわけじゃない。

「お、お前ら」

誰かが屋上に来たようだ。

全員が気だるげな目線を向ける。

長谷川。

よく、いらんときに来る人だ。宿直なんだな、多分。

バキヨ。

夜の肌寒い空気に骨が軋むような不快感。

長谷川が倒れた。何が起こったのか？

倒れた長谷川の横に楓先輩がいる。

「ああああごめんなさああああい」

落としてしまったらしい。

あーあ。何をやっているんだろ。俺ら。

「うわあ」

又野さんがいった。

声だけ聞けば、感動していると思うだろう。それはいい。

問題は何に感銘を受けているのか、心震わす主体ではなく、それに影響を与えた側が問題なのだ。

彼女を感激させたもの。ガラスケースに入ったそれを今、俺と又野さんと、そして、残念なことに木霊先輩を除く部員が見ている。

一見すれば、ねじ込み式の万力のようだ。ねじの下方には半球のヘルメットを思わせる部位が付いており、これだけ見てもその正体は

分かり辛い。しかし、親切なことに、ガラスケースにはプレートが掛かっている。

——『頭蓋骨粉碎機 ヴァネツィア 十七世紀』——

ふうん。粉碎機だけに、ふうんさいですか。とか。

つて、ふうんじゃないし、寒いオヤジギャグいつてる場合でもないし。単に、怖いって。

頭蓋骨を万力の圧力で締め上げて、苦痛を与える機械。所々の鍔具合とか、土台の木の黒ずみ具合とか、血のはずはないんだけど、いや、もしかしたら、血かもしれないけど、いや、もっとすると、脳の汁とかかもしれないけど……。ホラーだよ。

もとい、これが実際に使用されたブツであるから、そもそもホラーですらなく……。なんだろう、ありえないから怖いのではなく、そこに現前するからこそ恐ろしい？ そんな感じた。

幽霊つてのも、実害がないからね。実害を出すのは妖怪ですよ。

妖怪。

「これもすごいなあ」

今度は別のガラスケースを覗きに行く又野さん。井塚先輩と楓先輩は俺と同じく、動き気はないらしい。

「唯も好きだのお」

他人事、いや、完全に他人事だし、そもそも、『拷問危惧展覧会』に来てる時点で周りの目とか気にする必要なんて、ミジンコの毛ほどもないわけだが、他人の振りをしようとする三人である。

「ホロコーストネタが好きですしね」

「なんだろうなあ。抑圧された何かとか」

「フロイト先生に訊いてくださいよ」

「私は詐欺師は嫌いだなあ」

教祖様とフロイト先生、詐欺師と宗教家の違いが知りたい。でも、いわないで置く。

「まあ、いいんじゃないかなあ。木霊とか溜め込むタイプだからさあ」

楓先輩はガラスケースを撫でつけながら、いった。

ふと、先日の上戸鍋パーティーが浮かんだ。

泣き上戸の楓先輩。あれも抑圧とかじゃないのだろうか。破天荒に見えて、実は溜め込むタイプなのではないか、と思った。

「楓先輩はどうなんですか？」

「私、見て分らない？」

「でも、この前、酔って凄かったですよ」

「は、ちょ。私、何かやばいことした？」

詰め寄られた。

「脱いだ」

井塚先輩のいつも通りの茶々。お茶、一杯入ります。

「着てたわ！」

「俺が着せたんだよ」

キザったらしく、髪をそよがす。

「優くん、真実は？」

「脱いでません」

「痛っ！」

井塚先輩が跳ねた。

弁慶を蹴られたらしく、抑えている。

「静かにしなさいよ、館内ではお静かにい。で、優くん。私、何したの？」

「泣き上戸でした。ひたすら、謝ってたので、何か後ろめたいこととかに、そのさっきの抑圧？ とか」

楓先輩は一瞬だけ、困った顔をする。

けれど、それはひと時で、すぐに、いつものハイテンション気味の笑顔に戻る。

「ないない。酔っ払って何をいったかとか間に受けちゃいけません」

「でも、アルコールってのは自白剤としても——」

「もお。そういう物騒な話はいいいから。この——」

楓先輩は、フロアにいくつもあるガラスケースをぐるっと伸ばした掌で指して、

「ヤバ目のブツで十分」

といった。

確かにと頷く。

「でも、人間ってアレですね、こういうのを見ると思います」

「ホントだよなあ。力で服従させるっていうか」

「信仰で服従させなきゃ意味ないよねえ」

「お前がいうなよ、楓」

「あはは。それは置いて」

「冤罪とかも一杯出たんだろうなあ」

感慨深そうに井塚先輩はいう。

「嘘でこの窮状から、とうか、死んだ方がいいとか思うでしょうね」

「皆、読心術を使えるべきだな。人類皆エスパー、それで疑心も暗鬼も解決」

サムズアップする。そして、俺に向けられるウイंक。もしかして、更衣室覗きとかしてるけど、ホモなんじゃないだろうか？

いや、この場合、バイセクを疑うべきか、うん。

しかし、珍しく、人間についてを語り合う真面目な三人である。

『拷問危惧展覧会』のチケットがあるので、といった又野さんについて来てよかったかもしれない？ 木霊先輩は来なかったけど、痛いのはイヤだとか、自分よりも他人が痛そうなのを連想するのがイヤだとか、そういう理由で。さすが、兎のような優しい心です。兎、そういえば、なぜ、又野さんはひとりで来なかったのかなあ。実は、兎なのは又野さんだったりするかもしれない。本当は兎は寂しさで死んだりはしないんだけどさ。

「暴力かあ、女だから大変だわあ」

楓先輩がワザとらしくいった。絶対、突っ込み待ちである。この人、突っ込み殺しな反面、たまに突っ込み待ち状態なのが困る。

空気を読み難いというか。まあ、レイケン部員は俺と木霊先輩以

外、空気なんてそんなもの読めるか！ だけどね、昨今の流行でいえば、KY？ でも、空気って読むの難しい。だって、字が書いてないのに読むとはこれ如何に？

とか、考えている間に、井塚先輩が突撃した。

「お前がいうな！ 暴力女があ、見ろ、脛<sup>すね</sup>」

ああ、痛そう。蹴られた弁慶の泣き所が紫色に内出血中。

木霊先輩じゃないけど、他人が痛そうなのを想像するのも、痛いかもしれないと思う。

それよりも、この場合、愉快が先に立つけれど。

「皆あ、来て」

いつも小声の又野さんが手招きしながら、結構大きな声で呼ぶ。おつかしいなあ、又野さんは長門有。希とかそっち系だと思ったのに。

しかしである。これは、逆にいえば、自分でキャラ造りしてないともいえる。少しだけ、俺の中の又野さん高感度がアップ。多分、彼女はどうでもいいと思ってるだろうけどね！

三人して又野さんのもとへ行く。

又野さんはガラスケースではなく、壁側に置かれた風呂釜のようなものを指さして、はしゃぐ。なんだろう？ これ。

「水責めだって」

魔女は水に沈めても死なないとか、ああいうのだろうか？

「死なない程度に水に入れるのかなあ」

どうやら、宗教関係には強そうな楓先輩もよく存じないようだ。

「そうそう、あとは水を延々のませるとか、そういう水責めもあるんだよ」

長い台詞が長いぞ。又野さん、酒について語ってたときみたいだ。そして、こういうとき無口なんだよなあ、井塚先輩は。

「水ってなんか清潔ってイメージだけどね」

俺はいう。

「それはRPGのし過ぎね」

と、楓先輩。

「水は汚い」

又野さん。否定された俺、泪目。

「でも、火責めよりはマシかも」

「なんで？」

「火責めは外に残る。根性焼きとか」

「おいしそうね」

どこがですか、楓先輩。

「確かに」

頷かないでください、井塚先輩も。

「それ、今川焼きじゃ」

冷静に突っ込む又野さん。全面的に同意。

一字一句あつてない。焼きしかあつてない。

「でも、今川焼きって結構、地方で名前違うんだよ」

「ああ、大判焼きとかいうね」

「北海道で、餃子型の餡子饅頭を中華饅頭っていうようなもん？」

脈絡ないなあ。ほんと。

「今川焼き食べたいなあ」

「そういえば、外に売ってたけど」

さすが、上野動物園近辺。的屋とか大道芸人が一杯ですね。

「じゃあ、帰りに買って帰ろうか」

「いいね」

しかし、本当に季節感がない人たちだなあ。温かい饅頭とか冬に食べるものじゃないのかなあ。確かに、店舗を持ったところなら、年中売ってると思うけど。売ってる的屋も的屋だし、そんな露店出すなともいえないし、権限とかないけど。上野にもヤーさんのシマとかあるのかなあ？　ますます、どうでもいいことだけど。

と、そんなことを考えていると、

「置いてくよ」

「あつと、待ってください」

次のブースへ向うらしい。

えっと、次の展示は『アイアンメイデン』らしい。なんて、ベタな。血の伯爵夫人ご愛用のあれですね。楽しみです、性的な意味で。

「おじさん、どんと焼きくださいな」

どんと焼き違う！ それは大正月とか小正月とかに色々穢れを焼くもので――。

「おうよ」

なぜか、応じる的屋のおっさん。待てい！

「黒餡、白餡、小清水餡こしみず、それぞれ粒と濾しがあるけど」

小清水餡おしみずって……御清水庵おしみずでしょうか？ F A。

そんな謎なラインアップがあると、楓先輩頼んじやないますから。

「じゃあ、小清水餡七つ、もち粒」

「白餡黒餡、粒で三つづつ」

「黒、粒、十個」

皆、食い気がすばらしい。

というか、小清水餡ってのはまさか、蕎麦だった餡子じゃないよなあ。そもそも、俺的には白餡はいんげん豆であって、アズキをつかってない時点で邪道。鯛といいつつ、どこか南国のワケワカメな魚をつかうこと以上の罪。なぜなら、あれは、まだ鯛に見えないこともないが、白餡は、白い、せめて、詐欺るなら、黒くせよ、黒く。黒豆のごとく！ 黒豆は黒ダイズだから、ダイズだ、ダイズとアズキは大と小、こっちなら許せるぞ！ 果肉、白いけどね、黒ダイズ

「そっちのあんちゃんは？」

ん。待てよ、土産に買ってくか。拷問器具のレプリカとか、キーホルダーなんか土産にできないし。

となると、親父とお袋と妹と——、あ、木霊先輩にもかなあ。和菓子嫌いかもしれないけど。今川焼きを和菓子と呼んでいいのか？ 餡子つかってるし、十分、肯定。ああ、木霊先輩がスイーツ（洋菓子的な意味で）フリークじゃなくて、甘いもの好き（全ての甘味料好きという意味で）であることを祈ろう。ま、余っても、俺が食うし。

「黒餡粒で、二十個」

「「食うねえ」」

皆がハモる。いや、全部俺が食うわけじゃないし。

そして、帰路。

展覧会といえば、恒例の最後の土産ショップで買った図録を眺めながら、又野さんがニヤニヤしている。口には今川焼き。

隣で、楓先輩が小清水餡とやらを食べている。中身は——、やはりというか、蕎麦<sup>そば</sup>掻<sup>か</sup>つばいものが詰まっている。

しかし、電車内で食するとは行儀の悪い。とは思うものの冷えたら、確かにおいしくない。バック越しに伝わる今川焼きの熱が段々弱くなっているし。

「小清水餡おいしいですか？」

「蕎麦掻食ってるみたいだよ」

やつぱり、そうなんです。……。砂糖醤油も混入済みなのだろうか。色々謎い。

そうこうしている間に電車は俺の下車する駅へ至る。井塚先輩はひとつ先、又野さんと楓先輩はふたつ先で降りるらしい。ここで、降りるのは俺だけだ。

「三軒寺あ」

駅員のコール。

俺は皆に別れを告げて、家路に着く。

そして、ここで重大なことを思い出す。俺は、木霊先輩の家を知らない。折角の今川焼きが。

「珠美くん？」

しよげて、道行く俺の背後から声。この声は間違いない。神よ、この偶然に感謝します。速攻、振り返る。目の前に木霊先輩が立っていた。

「奇遇ですね」

「ですね」

木霊先輩は愛らしく微笑む。

「どうでしたか？ 展覧会」

「色んな意味でおもしろかったですよ」

「色んな意味かぁ」

「ところで、根性焼き食べます？」

間違えた。楓先輩のせいで、まちがえた。

木霊先輩の顔に陰が走った。

「な、何を……？」

明らかに動揺している。そりゃ、そうだ、いきなりこんな意味不明なことをいわれれば、当然の反応だ。ここで、当然でない反応を返す人物の心当たりは三人分あるが、木霊先輩はこれでこそ、彼女らしい。

「あ、すいません。今川焼きです」

「今川焼き？」

「大判焼きです」

「あ、分かった」

平常心を取り戻し、木霊先輩は再び微笑んだ。

よかった。変には思われていないようだ。

「どうぞ——」

俺はバッグから包みを取り出そうとし、道端というのも何なので、近くの公園へ向う。何となく、デートっぽい、胸が高鳴った。

「冷えてますね」

「半時間くらい、電車で揺られてましたから」

「でも、ありがとう」

「いえいえ」

「私、好きなんですよ。大判焼き」

これは好感度パラメーターが上昇か？ インビジブルなパラメーターだからデバックモードでしか閲覧できないのが残念だ。

二人して暮れなずむ太陽を眼前に据え、緑のプラスチックベンチに腰掛けた。

「知っていました」

知ったかぶる。

「え？ 私いいましたっけ？」

純粋な木霊先輩は見事、騙された。

「俺、エスパーですから」

嘯く。

「はは。井塚くんのお陰ですか？」

「かもしれませんね」

「いいね。溶け込んだね」

「はい。木霊先輩のお陰です」

「私??」

すつとんきような声で木霊先輩はいった。そんなに以外なのだろうか？

「はい」

真剣な表情で俺は肯定。彼女の両目を見つめて——って、何となく告りましよう的なモードに自分が入っている気配を感じる。雰囲気というか。当然の話、そんな空気になっているのは間違いなく俺だけなのだが。

「私、あんまり顔出してないし……」

「何か用事があるんでしょう。来たって、駄弁ってるか、麻雀してるか、ESP実験してるか、三択ですよ」

空気を振り払うべく、努める俺。頑張れ、俺。まだ、告白にはフラグが足りない。絶望的に不足している。これは、男の勘だ。女を狩る、ハンターとしての雄の本能だ。息が速くなりそうなので、胸

を押さえる。

「餡子でも詰まりました？」

木霊先輩は体よく勘違いしてくれたらしい。天然気味なのもナイ  
スアシスト。

「そんなところですよ」

「粒餡ですしね」

別に粒とか濾しとかは無関係だろうけど、頷く。

「白餡ってどう思いますか？」

「邪道ですね」

意見の一致を見る。

「だから、全部黒餡です」

そして、また忌々しいあいつは鳴った。

いつもの携帯電話。木霊先輩の。また、呼び出されて、俺の前か  
ら去るのだろうか？

木霊先輩は、手提げからケータイを取り出すと、サブディスプレイ  
を見つめる。誰から掛かってきているのか、分かるのだろう。最  
近の機種はサブディスプレイが簡素化しているけれど。

先輩はケータイを開き——しばらく見つめ、切った。

「いいんですか？」

「いいですよ」

意外な展開だ。この前は酔っていたけれど、今日は素面だ。友人  
からの誘いなのか、親から帰れといわれたのか、真相は知れない。  
けれど、木霊先輩が俺を選択してくれたのはとても嬉しかった。

「告れ」

葉桜はいった。他人事なので、二へ二へしている。

「イヤだ」

「なぜだ？」

「まだ、早い」

公園のベンチでも我慢したのだ。したかったけども。時期尚早。

「いやいやいやいや、十分その話を聞くに好印象だぞ」

「待て、カレシ疑惑もあるんだ」

「そのときは、そのとき、轟沈爆沈するだけさ」

「それが問題」

明らかに楽しんでいる風で葉桜は俺のベッドの縁を脚で叩いた。

「しかし、お前も上手くやってるね」

「全然だつての」

「中学時代は困ったヤツだったのに」

それは黒歴史というのですよ。ダークヒストリー。ダークサイドへ落ちなかった分マシかもしれないけども。

「まあ、お前のお陰だ」

実際、中学時代の無二の親友な上に、暗黒面へ俺が落ちなかった理由は葉桜にある。素直に褒めておこう。それに、結局俺自身が入部しに行ったとはいえ、自ら赴かなかった場合、多分、楓先輩が拉致しに来ただろう。

そして、同じように木霊先輩に会えたはずだ。そう考えると、こいつが部活届けを勝手に出していたことも今更ながら、ナイスプレイであるとも思った。

「それは、よかった。高校じゃあ、構ってあげてないしなあ」

「別に構わんでいいわ」

「が、熱心だよな。お前」

「どの辺？」

「昼休みも即効消えるじゃん。俺もたまにはお前とメシ食いたいぜ」

「ごめんなあ。昼休みも木霊先輩狙いさ」

「だから、熱心だつての」

葉桜は俺の背中を叩く。どこか、バカにしているが、その根底にはお前のことは分かっているぜという暖かさがあるから、不快ではない。しかし、やりかえしてこそその男の友情。俺も叩き返す。じゃ

れあう。ベッドシートが芸術的皺模様を生む。

「そついや、木霊さんも見えるって？」

「ああ、そうなんだよね。そこもなんかシンパシーが沸くっていうか」

そこも木霊先輩に引かれる理由。

今まで、一緒に見たことはないけれど、非科学的な幽霊の正体が見えるかもしれない。少なくとも、枯れ尾花ではないと俺は思う。個人的体験から。あくまで、個人的体験ゆえに、人それぞれの幽霊観や、見え方が存在するともいえるかもしれないけれど。

「運命だな」

そう持つて行きたいらしい。下世話な野郎だ。そのにやけた顔の緩んだ皮を引っ張ってやろう。身を近づける。かわされた。

「いやいや」

「デイスティニーだな」

「いやいや」

「キズメツトだな」

一瞬、キスメイトに聞えた俺、自重。いや、自嘲すべきか。

「なんだぞれ」

「運命、英語」

「どうでもいいこと知ってるなあ、相変わらず」

「褒めんな」

実際、一片たりとも褒めていないが、照れくさそうにするな！

「でも、なんか、お前のときを思うと、余りいい気分じゃないなあ」

「ああ、けど、和むらしいぜ？」

「それなら、いいのかなあ。やっぱ、逃げなんじゃないかなあって思ってる」

過去を鑑みるようすで腕を組み、葉桜はアイドルポスターの掛かった白い壁紙を見やる。

「逃げで見えるならいいと思うよ。俺の場合と違ってさ」

俺は俯く。余り、思い出したくはない、やっぱり、黒いメモリーだ。脳の中でもきつと、コールドタルのようにどす黒く、あたりの脳細胞をその重々しい粘性で侵食しているだろう。タバコに犯された肺のような感じで。

「確かになあ。ああ、ごめんなあ。掘り返して」

片手ですまんのポースを葉桜はしながら、いった。

「いいよ。やつぱ、理由が知りたいからさ」

「レイケンの成果はあったか？」

「ないない。全然ない。あれは雑談クラブ」

「そんなこつたるーと思っただけど、木霊さんの事例は役に立つかな」

「うん。ちょっと、そう思う。非科学的なこのことにケリつけるよ」

「ああ」

「じゃないと、いつまでも黒歴史だからさ」

そう、このままではいつまで経っても歴史は黒い。タルを除去するのは大変だ。座礁したオイルタンカーが浜辺を汚し、海洋を汚染するさまを見れば、NPOの努力は焼け石の水にしか見えない。

でも、最終的に海を取り戻すことができる。うん。ありがとう、葉桜、少し前向きになった。

「ありがとう、前向きになったよ」

「よせや、水臭い。で、告白か？」

「なぜそうなる」

「いやだって、前向きにつて」

「政治家のいう、前向きで考えてくれよ」

「はは、なら現状維持か、アングラ工作かどっちだ？」

ピースサインのように中指と人差し指を葉桜は立てた。二択ということを示しているのだろう。いや、ジェスチャーだ。

「アングラ工作に決まってる」

ようするに、絡め手。

現状維持のような気もしないでもないが。

しかし、現状維持の皮を破るのなら、手始めの『電話の相手』を  
詮索するのもいいかもしれない。

「ヘマするなよ」

葉桜は俺の肩に手を置く。

「お前も協力しろよ」

俺も親友の肩に手を置く。

「って、最近頼ってこないじゃんか」

「それもそつだなあ」

告白する気はないけれど、少々、シュミレーションしたい気持ち  
になった俺は、体育館裏へ向った。ベタなテンプレとしかいいよう  
がない場所だけれど、俺にはそんなとつぴな考えは浮かばないし、  
常人には無理だ。

体育館の入り口と、床に接した吐き出し窓からキュッキュツとい  
うバツシュと床板の協奏曲、いや、むしろ、DJがレコードを擦る  
アレだろうか。ターンテーブルで。でも、そもそも、ヒップホップ  
部なんかないしね。ダンスクラブが敷地内にあるはずないしね。前  
者に決まっています。定説でした、ごめんなさい。

考えうる可能性としては、バツシュってバスケット部に限定せず、バ  
レー部かもしれないとか、そういう思慮深いことをもつと巡らそう  
って話。何、モノトークしてるんだろうなあ、これはシュミレーシ  
ョンだけど、気持ちが高ぶってるってことだよ。

とかなんとか、グチャグチャなスパゲッティ・プログラム（誤用）  
を抱えつつ、目的地は後、体育館の角を曲がるだけとなっていた。

意気揚々と曲がろうと、足を――。先客がいた。慌てて引込む。  
危ない危ない、野暮過ぎるというか、デバガメしてしまうところだ  
った。と思いつつ、デバガメは継続。耳だけで。参考にしておこう

と算段し。

「なあ。最近うざいんだよ」

あれ、告白じゃない。喧嘩だろうか。イジメか。

イジメ……。イジメだったら、どうにかしないと。脚が震えた。

しかし、取り越し苦労だったようで、声は女ひとつ、男ひとつだった。もつとも、イジメの可能性はある。何も一対多が全てじゃない。

「だから？ 私に何をさせたいの？」

険悪なムード。イジメではないにせよ、余り、聞いていて気分のいい話には聞えない。しかし、女の声は聞き覚えがあるどころか、間違いなく、楓先輩のそれであった。僅かに角から目を突き出し、確認した。

何となく、興味が沸いた。単なる好奇心だけど。

男の方は後姿だけだったが、どこかで見覚えがある気がした。が、きつと廊下ですれ違ったとかそういうレベルで、はっきりとは分からない。もしかして、前世の因縁とかいう展開はないよな。

「辞めさせるよ」

「あんたが辞めればいいでしょ？」

「いいのか。そんなこといつてさ」

「うっ」

何か弱みを握られているのか、楓先輩は呻く。

「ほんとさあ、あいつの親もうちの社員だったらよかったのによお」  
話が全然読めない。第三者の話題。

「あんたの会社じゃないでしょう」

「どうせ、継ぐんだよ。俺が。お前ら庶民と一緒にしないで欲しいな」

「でも、私、何もできないけど」

「じゃあ、沙子がどうなるか、見てみるといいさ」

「ちよつと！ まだ、沙子に」

楓先輩の声が荒がる。そもそも、なぜ、ここで木霊先輩の話題が

？ 意味が分からない。

落ち着け。フリーズ俺。違う違う、クールダウン俺。フリーズしちゃいけないぞ。テンパるな。テンパイがバレルぞ。闇テンできないぞ。じゃあ、リーチか。ダメだ。ダメだ。話を整理するんだ。

「はあ？ お前がそれこそ、何かできるわけ？ 何もできないだろ？」

「……」

「どっちにせよ、お前は沙子にも、俺のオーダーもどっちもできないってことだろ？」

「——」

「役立たずだな、お前」

「うるさい、ポ——」

「はあ？」

男の恫喝じみた声の後、しばしの沈黙。

「ごめんなさい」

楓先輩は謝った。

あの時とは少し、いや、大分違う謝罪。

俺に意味不明に謝った時とは何かが雲泥の差を持っている。何だろう。分からない。あの時は、彼女は謝っていたけど、俺には理由が判らなかった。だけど、謝罪そのものは真摯なものだった。でも、今のは、相手の男は謝られる理由を知っているけれど、今の彼女の謝罪は嘘、フィクショナル——。そんな気がする。

「ふん。わかりやいいんだよ、わかりや」

いった後、唾を吐く音。

そして、足音。こちらに近づいてくる。

俺は身を隠した。

男が通り過ぎる。

やはり、顔は見れなかった。

男が完全に視界から消えるのを見届け、俺は楓先輩をもう一度、見た。また、しおらしくしているのではないかと思ったからだ。し

かし、逆だった。彼女は憤怒の顔をしていた。

「先輩」

俺は声を掛けた。

「優くん？」

先輩は取り繕うように般若顔を常の顔に戻す。

「今の誰です？」

訊いてみる。多分、応えは得られない。

案の定、楓先輩は誤魔化した。

「それは気にしない」

「どうしても？」

「ポアします」

「う……」

精神崩壊したくはない。するなら、カミィ。みたく最後の花道と  
いうか、盛大にその精神を魂を捧げてからにしたい。

「すいません」

「よろしい」

「でも、一ついいですか？」

「うん」

「なんで、あの男にはそういわなかったんですか」

「……」

「弱みでも？」

「私がそんな風に見える？」

見えない。なんでも、ごり押しするような人だ。そうは思えない。

「いいえ」

「なら、よし。破門は取り消そう」

破門……。これの恐ろしさは目にしていないから、わからないけ  
れど、あの時の井塚先輩の戦々恐々振りから察するにオドロオドロ  
シイに違いない。

ひとまず、謎は残ったが、命は助かった形だ。

「で、何してたの？ こんなトコで」

「シュミレーションです」

「へ？」

訳が分からないという顔。当然だ。俺だって、葉桜がこういったら、何をいつてんだ、ヴァーカとっているだろうし。

「こつちの話ですよ」

「そつか、部室行く？」

「はい」

部室には誰もいなかった。又野さんすらいなかった。無人なのは珍しい。

「楓先輩」

「何？」

パイプ椅子に腰掛ける。

ふと、窓際の椅子にのつた本が目に入る。さっきまで又野さんはここにいたらしい。トイレだろうか？

「神様つていると思つてますか？」

「え？ 唐突だね」

「だつて、楓先輩、教祖なんでしょう？ いつ、天啓受けたのかなつて、気になつて」

「そんな古い話じゃないよ。ムハンマドだつて、最初はビビつてたしね」

「楓先輩もですか？」

「そうね、そんなところ」

「俺もです。最初、見たときつてうわつて思いますよね」

「お化けと神は違ふと思うけどなあ」

「日本的価値観だと遜色ないと思いませんか？」

「確かにね。余り変わらない。神と悪霊の差つて何だろうね」

「分かりません」

「私はひとつだけいえるよ」

楓先輩は椅子に掛けた腰をずらし、掛けなおす。そして、頼杖を

付く。

「得体が知れぬものは、悪霊イービルとか悪魔サタンなんだよ。幽霊ファントムだってそう、恵みをもたらすとか、そういう要素があれば、それは精霊とか田の神とか、そういう土地神みたいなものになるのかな、って思ったりでも、そういうのって、共通認識の問題で、神つてのは個人に宿るのかもしれない、見ているのは教祖ただひとり。だから、後の教団がその道を外して行くのも頷けるかな」

ちよつと深い話だ。楓先輩が知的に見えた。

「でも、それだと主観の差ですか？」

「そうだと思うよ。怖いものは化け物なんだよ」

怖いものがバケモノ。だから、その正体を確かめたい。そう、思うんだろう。俺が幽霊を非科学的だと思うのもそこから来る考えでレッテルなのかもしれないと感じた。

「じゃあ、木霊先輩は？」

「だから、私もね、木霊に見て欲しいんだよ。私を救った神様を」  
深い感情のこもった眼差しで先輩はいった。

「でも、それでいいんですかね」

「へ？」

「キリスト教だって、主の力じゃなくて、キリストの力だったと思うんです。俺」

「そうかもね」

思案顔で楓先輩は続けた。

「実際のキリストは人間的なんだよね。ユダを裏切りものと謗り、最後まで許さないとってたわけだから。死んでしまったら、もう誰も本人を知らないから、延々と神格化が進むだけだね。そうだね、優くんのこと、一理てか二理くらいあるかもね。他者に頼れない人間が何か超常の存在を求めるのかも？」

あ。合点がいった。

俺が幽霊の見えなくなった理由。

あのとき、葉桜がいたからだ。多分。

「楓先輩」

俺は先輩の両手を握り締めた。顎が掌から離れ、先輩はバランスを一時失う。

「ちよっと」

「ありがとうございます。レイケン入ってよかったですよ」

きっと、俺はそれこそ天啓を受けたキリストの顔をしているのだろっ。

なぜ、愛や助け合いと宗教がリンクするのか？

そういった類の回答も得られたような気さえする。こういう感情の高鳴りを万能感とでもいうのだろうか？　だとすると、今の俺はその感覚に満たされている。

「何が？」

先輩は訳が分からず、戸惑っている。

当たり前だけれど。

「こっちの話です」

俺は誤魔化した。

最近、楓先輩の影響か、こういう誤魔化し方が増えた気がする。

そして、案の定、楓先輩は、「それ、多いね」といった。

「先輩の棚上げみたいなものです、これから十八番にしますね」

「はは、やめてよね」

先輩はためらいつつも、笑みを返してくれた。

## 終章

### 最終話

「おうい」

葉桜が俺を呼ぶ。

「何？」

「お呼びだ」

こつちを向いたまま、葉桜は後手で出入り口を指し示す。  
三年生と思しき人物が立っている。

「誰？」

「お前、知らないのか？ 霧島永世、工場のドラ息子だよ」

「何で俺に用があるんだろう」

「知るかよ」

葉桜は霧島先輩が嫌いなようで、忌々しくも吐き捨てた。

「分かった。まあ行つて来る」

「よう。新入り」

「新入りですか？」

開口一番、霧島先輩の言つた意味が取れずに俺は困惑した。

「そつだよ。お前、レイケン部員だろう？」

「先輩は？」

「俺も部員なんだよ。幽霊だなあ。まあ、来い」

俺は促されるままに教室を後にした。

いわれてみれば、レイケンの部員数は新入生歓迎のビラに四人とあつた。最初、部室に行った時、又野さんを含めて四名だつた。又野さんは一年生だ。数に入っていたはずがない。それに、三年生がいなかったというのも、今、考えるとおかしいともいえる。

俺は旧校舎——現在は少子化で使用されていない——に誘われた。机の散乱する、蜘蛛の巣だらけ、埃まみれの教室に入った。

霧島先輩は、窓辺に寄りかかり、口を開く。

「なあ。お前、レイケン辞めてくれないか？」

「なんでですか？」

意味が解せない。

「最近、木霊が渋るんだよ」

「はい？ えつと、カレシですか？」

「そんな所だよ。この前、鬼頭にはいったんだけどよあ」

チャラチャラした茶髪を先輩は掻き<sup>むし</sup>った。

思い出した。

この人は、この間、楓先輩と体育館裏で話していた人物だ。

あのかきはかなり悪辣な人物に見えたが、今はそんな印象はない。善人には見えないけれど。それに、池田。作だって学会員とメディアの評価は割れている。結局、人の批評は個人のセンス、ということなのか？

そして、レイケンを辞めろといわれても、俺に辞める理由はない。まだ、木霊先輩と親睦具合が足りない。まだまだ、先輩と後輩に過ぎない。

「イヤです」

「どうして？」

苦々しい視線を俺に寄越す。きつと、今までの人生で思い通りにならなかったことが少ないのだろう。霧島、つまり、霧島重工の大株主で創業の一族、霧島家の御曹司ってことだから。しかし、こんな二流の進学校に通っている時点で、大して頭のデキはよくないのだろう。

そんな思いが漏れていたのか、先輩は俺をひと睨みした。ヘビのような眼差しを感じた。

「大したことやってないだろうが、あの部活」

「ですけどね……」

木霊先輩がいるから——と喋っているのだろうか？

「はあ？ 木霊あ？ 沙子がどうしたんだよ？」

思わず口に出ていたらしい。こうなつては、後には引けない。片道燃料しか積載されていない特攻機に等しく。

それにしても、沙子だなんて、下の名を呼び捨てにするとは……。それでカレシでないとか、ああ、忌々しい。憎々しい。沸々と怨嗟の念が沸き立つ。無意識に語気が荒がるのを覚える。

「悪いですか？」

「悪いなあ。確かに、鬼頭にせよ、沙子にせよいい女だからなあ」

下卑た笑い。品性がない。時期霧島重工の担い手とはどだい、思えない。

「でも、困るんだよなあ」

「何がですか？」

「何度もいわせるな。沙子が最近渋るっていつてんだろ」

「魅力がないんじゃないですか？」

自分の言とは思えない、辛辣な言葉が発せられた。

「だから、困るんだよ。沙子が渋る理由なんぞ、お前以外に考えられないんだよ。要素としてさあ」

それは、木霊先輩が俺に好意があると取っていいのだろうか？

嬉しい話だ。

先輩は続ける。

「そうなるとさあ、俺ももうちょっと強力な手段に出ないといけな  
いじゃん？」

話が読めない。

「はい？」

「つたく。頭悪いなあ。まあ、いいや、これは忠告だよ。ま、お前  
がそれでよくても、誰かさんが痛い目みるかもな」

いつて、やに下がった笑みを浮かべる。

「痛い目ですか？」

「そうだよ。そのとき、後悔するといいさ」

そう吐き捨てて、先輩は教室を出る。丁度、ドアの框を跨いだ瞬間、チャイムがなった。

昼休みでないから、休み時間は十五分しかないのだ。

俺は慌てて、自分の教室へ、戻る。駆け足で。息が上がった。

日曜日。日曜日といえば、盛りの付いた青少年なら、カップルでセカイ系な空間を醸造し、周囲の放つ瘴気と腐海にはわき目も振らず、最後にはオームに轢かれて死ねばいいのと思う。それを、人は羨ましがりという。妬みともいう。呪ってやろうか？

しかし、人を呪わば穴二つという。残念だが、俺は自分の墓穴以外は掘りたくないのだ。勿論、ケツを掘りたくもない。女人例外。定説です。

三軒寺駅はそこそこ大きい駅で、駅ナカには商店街もあるし、駅チカも充実している。数分に一本でるバスターミナルは大きく、ロタリーも広い。学校は徒歩通学なので、普段、縁がないのだが、今日は俺の大ファンの漫画家の新刊が出るのだ。中々、マイナーで昨今の萌えブームと一線を画す絵柄のせいかな、それとも、ネタが八十年代臭いからか、小さな近場の書店には売っていないし、かといって、マンガゲーム専門店にもないから困る。ノルマン現象中で、プリンセス・ハオ病に罹らないことを祈るばかりだ。おのずと、大型ブックストアのお世話になる。

俺は自動ドアを潜った。

最近の本屋はカジュアルだと思う。古本屋はそうではないけれど、雑然さが足りない。ジュンク堂フローワーどもめ。

お目当てを見つけない、コミックコーナーへ。新刊なのに平積みにならなっていない。悲しい。しかし、世の中にはマイナーだからいいという奇特な人種もいて、俺もそうだ。一冊取ろうと、書架に手を伸ばす。すると、同時に手を伸ばした人物。手が触れた。

「すいません」

「あ」

又野さんが不思議な顔で俺を見ていた。

普通なら、ここで偶然にも知り合いが同じ作家のファンだったことに喜ぶべきなのだろうが、俺の注意は又野さんの頬に向った。バカでかいガーゼが貼られていた。又野さんは平均身長より結構低いので、顔も小さく、ガーゼに顔半分包まれているみたいで、おかしい。反面、異常な感じを受けた。

「どうしたの？」

「何が？」

「それ」

ガーゼを指す。

又野さんは答えず、俺の注意が逸れた隙に、コミックを棚から取り去った。

「あ」

今度は俺が「あ」という番だった。

「貰い」

又野さんはしめしめと謂わんばかりににんまりと笑う。

「ちょ、又野さん」

マイナー作家なので、二冊も入荷しているはずがない。

「好きなの？」

「うん。そうだよ？」

ちよっと、おれは慥然（誤用）として返す。

「違う」

何が違うのだろうか？

「え？」

「いい。これ、譲るから、ちよっと付き合って」

これは急展開だ。

まさか、告白か。

いつ、俺はフラグを立てた？ 思い出せ。

あのとき、落とされた記憶と、屋上鍋で「見えろお」と井塚先輩

と絡まれた覚えしかない。

心当たり、ないぞ？　ってことは、アレか一目惚れ。俺ってイケメンだし。性格も多分いいし。お、モテない方がおかしい気がする。来るから不思議。

「はい」

又野さんは俺にコミックを渡す。

「又野さんは直ぐ出るの？」

俺は他に用はない。

「ある。それにも付き合ってもらう」

俺の手を又野さんは引く。高校に入ってから、女の子によく手を引かれている気がする。さっきは、アベックなんてラブオーラの垂れ流しで、世界の不快指数を上げる公害発生源だ、最終処理場へ持つていつてから、夢の島で一生、夢現うつつの中で死ね。とかいつてごめんなさい。そこまでいつてないはずだけだね。

又野さんは店の奥へ進む。俺が普段、縁のないコーナー。恐らくサブカル。何気に怪しい商品群が並ぶ。装丁からしてオーラが黒い。『自白のさせ方』とか『現代の優生学の価値と応用』とか、又野さんが好きそうな書名が背表紙に書かれている。しかし、又野さんはそこで足を留めずに、サブカルコーナーを通り過ぎた。

「あれ？」

「どうしたの？」

先に行く彼女は振り返る。なんでもないと顔で示す。

「そう」

そのまま、法律のコーナーに到着した。サブカル以上に縁がないぞ。これは。

法律とか裁判所とかマジで怖いからね。裁判所通知って書けば、架空振込みも成立するしね。そういえば、親父がクレカの滞納を一年続けて、簡易裁判所に提訴されてたなあ。あれ、どうなったんだろ。簡易だし、民事にもならないレベルの問題を処理するんだから、きつと大丈夫だよな？

「あれ」

又野さんが指差す先、『六法全書』。電。文庫のとある作品の最終回が武器になるとか、某RPGでは本が聖職者の武器だとか、色々、そういう分厚い本。武器という言葉があるけれど、これは本物だ。確実に人を殺せる。何キロあるんだろう？ 本にキロとかいう重量単位を使うのも妙だが。

「今度は法律？」

「訴える」

「はい？」

真面目な顔でいう。ホンキか？ いつも、よくよく、表情と考えが読めない又野さんだ。真意は知れない。

「訴える」

「誰を？」

ほんと、誰を？

俺の問いに又野さんは不思議そうな顔で応じる。

「訴えたくないの？」

話が噛みあってない。

又野さん的には、俺も一緒に訴えるべき同じ事項があると思っ  
ているということだが……。

「何を？」

「え？」

困惑している。お互いに。

「ならいい」

いいんだ。付き合えてこのこと？ 残念。一応、又野さんは美少女（乱用使用厳禁）だし。これで、用事は済んだと俺は踵を返そうと――。

「待つて。運んで」

「え？」

「これ、重いから、運んで」

荷物持ちですか。

「うん」

断ったら、また、落とされそうなので、断れない。

最近の小さな女の子が暴虐つてのは、ブームなのだろうか。髪が赤だったり、ピンクだったりね。まあ、少なくとも、又野さんにツンデレ成分は一ミリもないから、大丈夫。大丈夫。くぎゅウィルスとかないから。

「こっち」

俺が駅の構内から出ようとすると、又野さんが引きとめた。そう  
だ、又野さんの最寄り駅は三軒寺ではない。電車賃があ。小皇帝マ  
ンセーのチャイナと違って、ジャパニーな少女少女の財布は、小銭  
入れかと思うほど、寂しいのだよ？ 小銭しか入ってないから、冷  
たいんだよ？ でも、しょうがないので、付いていく。

又野家は駅から遠く、高台にある瀟洒な造りの邸宅だった。南欧  
風の建築で、一見してリッチな気配がした。リッチな気配とは、金  
の匂いである。立地はあまりよくないが。

又野さんが玄関を潜る。俺がここまで付いていく道理もないので、  
分厚い某紫髪ツンデレが投げそうな六法全書を渡す。

「ありがとう」

小さく又野さんはいった。

奥の方から、歩いてくる人影が見える。黒のスーツにアッシュブ  
ロンドですと嘘がつけそうな白髪頭に、柔和な笑みと、癒し系口ひ  
げ。執事に違いない。名前はきつとセバシュチャン。定説です。

「お友達ですか？ お嬢様」

うはOK。としかいいようがない。

「違う」

さりげなく否定。

「はは。そうですか」

何か思い違いをしている執事さん。何か、いたたまれないので、  
そのまま、俺は「さよなら」といい、帰宅した。足が疲れた。棒と

いうより、ポッキーみたいだった。

――  
空気が悪い。

淀み切った空気。

風の流れが停滞しているという意味においては、雰囲気的な意味で。

全ての原因は又野さんだった。

負のオーラを放ちつつ、熱心に読んでいるのはオカルト本やサブカル本、昨日、俺と買った六法全書でもない。しかし、高校生であるものを買える小遣いってやっぱ、リッチだねと思う。

真剣で茶々を入れる余地のない眼差し。いつもそうかもしれないが、今回は部室の置物としてではなく、刺々しい気を放出している。さしもの、楓先輩もその異様な空気に気おされてか、口数が少ない。井塚先輩はいない。

柔道部に行っているそうだ。驚くべきことに、彼は柔道部員でもあった。幽霊部員だったらしいが、最近、熱心に通っているそうである。

俺の木霊先輩はいない。今日も来ないのだろうか？ そう思ったとき、引き戸がゆるりと開いた。

木霊先輩が入ってくる。足取りが重い。そして、彼女は部屋の空気を一層ヘビーにした。このプレッシャー、NTなのかもしれない、とふざけている場合ではない。先輩の腕には痛々しいほどにぐるぐる巻きにされている。包帯が。大怪我をおったのだろうか。骨折か？ しかし、ギブスを首を頂点にした三角包帯で吊ってはいない。火傷だろうか？

その姿に最初に声を出したのは、楓先輩だった。

「ちよっと、それ。どうしたの！」

声が裏返った。焦っているように見える。確かに、焦る。俺も焦りまくりんぐ。

「なんでもないですよ……」

なんでもないことはないと思う。

楓先輩はイスに掛けた木霊先輩の包帯の巻かれた側——右手を強引に取り上げ、包帯を剥し始めた。え、待ってくださいよ！

俺は止めようとする。しかし、睨み返された。手が止まる。

木霊先輩もなすがままだった。

床に解かれた布が落ちた。木霊先輩の二の腕が明らかになる。

そこには、痛々しい火傷があった。

これがただの火傷だったなら、心配するだけだっただろう。しかし、ただの火傷ではなかった。この前、冗談でいつてしまった、根性焼きの痕<sup>あと</sup>がいくつもいくつも浮かんでいる。湧き上がったのは、心配心ではなく、憤怒だった。

「これ！」

俺と楓先輩はハモって、叫んだ。

木霊先輩は右手を楓先輩に取りられたまま、俯いた。

「どうしたんで——」

俺の言葉は遮られた。真摯な顔で、楓先輩は俺を制止させたのだ。いつから？

坦々としつつも、冷たい氷のような声音で楓先輩は訊く。

木霊先輩は答えない。

「ねえ、いつから？」

再度の難詰。

答えない。

俺もやきもきする。口を出したい。が、出せない。そんな雰囲気だ。俺の知らない何かくすんだ黒い事情を感じる。俺は部外者。

「答えて！ 沙子！」

部屋中に木霊す声量。

「あいつ」

それに答えたのは又野さんだった。

楓先輩が又野さんを見る。

「永世なの？」

静かに又野さんは頷く。

「許さない」

般若の形相で楓先輩はいう。永世——どこかで聞いた名前だ。

「止めて」

木霊先輩が今日始めて口を開いた。

「なんで？ 分かってて……だから、部室に来たんでしょう？」

「でも、止めて。また……」

木霊先輩は泪ぐむ。

誰だ？ 木霊先輩に残虐非道、鬼畜、落花狼藉の限りをつくしたのは！

俺は長机を叩いた！

「誰なんですか！」

俺の問いにふたりとも視線を逸らした。

「関係ないよ」

「関係なくないです！」

「関わらないでください」

きつい調子で木霊先輩。

しかし、こんな事態に直面して、黙ってる？ それはチキンのすることだ。俺はチキンかもしれない。でも、世の中には許せないことがある。俺は中学時代の思い出がフラッシュバックしそうになるのを堪えて、「イヤだ！」と絶叫する。

わがままなガキを見る目が俺を射抜く。

いたたまれなさに俺は逃げた。

誰もいない場所へ行きたかった。

着いた場所は屋上だった。

晴天の空の下、気持ちを落ち着けようと、フェンスに寄りかかる

うと

塔屋<sup>とうおく</sup>を出る。が、先客がいた。

「よう」

先客はあの先輩だった。

直感が囁き、今までの状況から全てが読めた。

こいつが、霧島永世だ。

生徒総会で楓先輩に食って掛かってたあいつだ。

霧島は、タバコをふかしている。何時間ここにいるのか、足元にはシケモクが小さな山を造っている。

タバコ、そして、根性焼き。

部活初日、木霊さんがトイレで——そうだ。あの東校舎のトイレのタバコの山。

木霊さん呼び出す電話。

点が線になっていく。

なぜ、関わるな？

俺は部員だ。仲間じゃないか。

関係ないはずはない。

問いただせ。俺の中の正義が喚く。

「あんた」

「あんたあ？」

タメ口に不快に眉をひそめる霧島。

俺は迷わず前進し、殴った。頬を思いつき殴った。

霧島は仰け反ったが、大したダメージを受けた風はない。

「おまえ」

殴り返された。

準備もなく食って掛かったせいか、ボディに強い一撃を浴びた。喧嘩慣れのレベルが違った。

俺はひざまずく。

そのまま、蹴られた。

屋上の床の砂が口に入る。

腹と肩が痛い。

立ち上がろうとするのに、足が震える。

なんで、殴打した？ 今更の後悔。

なんて、自分が激情型だったのかという悔やみ。

でも、そんなことはおかまいなく、霧島は俺を蹴り続ける。

「うっ……」

「調子に乗るなよ、カス！」

「……」

「お前、人が日和ってりゃ調子付きやがってえ」

踏み付けられ、掛かる圧力が増す。

俺は縮こまる。

アルマジロみたいに縮こまる。

もう、これでしか身を守れない。

ハリネズミのような針はないから、俺は一方的にやられる。

アルマジロみたいな分厚い皮もない。

脆い。

心ごと殴りつけられている気分。

視界が白んでいく。

イタさにはなく――。

「うわああああああ」

――

雨が降っていた。空はどんより曇り、朝方とは思えない灰色の世界が拡がっていた。

傘をさして、学校に向う。

道中、すれ違う人々が怪訝な顔で俺を見る。

昨日、ボコにされたせいで、顔はキズバンだらけだが、そんな変な目線を寄越さないで欲しい。妙な気分になる。

曲がり角を折れる。

校門が――。

足が重くなる。

乾いていないコンクリに足を突っ込んでいるみたいだ。  
先日の負傷のせいじゃない……だって、見えるから。

俺の脚に纏わり付く靈魂が。

赤子のような、老婆の笑顔で俺を見ている。

よう――半年振りだな……。

また、俺に構ってくるんだな。

はは――ははは。これで、木霊先輩に自慢できるぜ。

和むような幽霊じゃないが、ちいとヘビーかもしれないが、まあいい。

グロで和む人かもしれないじゃないか。そんな奇特な人かな？　んな、わけないな。はは。拷問道具展覧会だっで行かなかったじゃないか。

「をい」

昇降口で葉桜が俺を呼ぶ。どこか、刺々しい声だ。

「んあ」

「傘、なんでさす？」

葉桜の顔には悲しげな色がさしている。何を憐れむように俺を見る？　なんだか、今日は人の目がやたら、目に、俺の目に、焼きつく、視線が背後から、痛々しく俺を付きぬく。なんでだ？　葉桜、お前もどうして、どうして、なんで、そんな顔をする？　俺、おかしいか？　おかしいか？　おかしいってか？

「悪いかな？」

低い声が出た。

葉桜は少し身を引いてから、咳払いをした。

「悪くはないけど……お前さ。また……」

「また」が何をしめすのか？　解ってるぜ、ブラザー。  
長い付き合いだものなあ。

「これで、木霊先輩に話のネタができたよ」

「そうじゃない！」

葉桜にしては珍しく声を荒げる。

何だってんだ？

俺が木霊先輩とネタを共有するのがイヤなのか？

「違う」

「なんで？」

「お前、わかってないのか？」

「何が？」

「何って——」

口ごもる。俺は待つ。回答を。

沈黙は続く。イライラして来た。

「早くしろよ」

「ああ……後にしよう」

そう葉桜がいうと同時に、チャイムが鳴った。

結局、その日は、放課後になっても葉桜のいう「後で」はなかった。

昼休みは部室に顔を出さなかった。

昨日のこともあって、顔を見せづらかったからだ。

でも、半日経つとそんな気分もなくなった。

一行に雨はやまず、どんよりした空気が支配的な廊下を歩んで、ホームルームの後は、結局、部室へ行った。

部屋に入るなり、俺の傷だらけっぷりを見かねて、珍しく、早くからレイケンに来ていた木霊先輩が血相を変えた。

「珠美くん……」

彼女の顔から血の気が引く。

そして、木霊先輩は泣き伏せてしまった。

「大丈夫ですよ」

そうだ。木霊先輩に比べれば、殴られた傷なんて、打撲なんて大

したことじゃない。

「それより、見てくださいよ」

俺は自分の足を差し出す。

見て欲しかった。俺に纏わりつく、この幽霊を。

しかし、木霊先輩は泣きつ面のまま、しゃくりあげつつ、「え？」と疑問を露あらわにした。

おかしい。そんなはずはない。

「見てくださいよ。ほら、幽霊ですよ。憑依されました」

「……珠美くん？」

木霊先輩は俺から目を逸らした。

やっぱり、これじゃ、グロいんだなあと感じたので、謝った。

「すいません」

「——そうじゃないよ……」

そのまま、木霊先輩は机につつぶして、嗚咽を漏らし始めた。戸惑う。

俺のせいかな？

違う。あいつのせいだ。

やはり、どうにかしてやらないといけない。

怒りが再燃した。動悸が早まった。

同時に、見えた。

新しいのが見えた。

その新しいのは、校庭を闊歩している。

どす黒いオーラを放ちながら、鬼のような面で、厳つい肩をならしながら、歩いている。怖いと思った。即時、目を背けた。もう、

見れなかった。木霊先輩が見なかったただけでもよしとしよう。

「木霊先輩、泣かないでくださいよ」

俺は慰めようと、肩を持つ。

触れた瞬間、木霊先輩の背中がビクッと震えた。

「ごめんなさい……」

木霊先輩は顔を上げる。兎のような目で俺を見る。

「何で、何で齒向かったの！」

今度は打って変わって、怒鳴られた。情緒不安定なのか、一貫性がない。困る。それに、いつもの丁寧口調が失われている。そんなに、俺の顔は今やばいのだろうか？

「だって、木霊先輩が……」

「止めてよ。楓だけで沢山だよ……」

なんで、楓先輩の話題が出るのだろう。

「え？」

「あの人が何かわかってるの？」

泪目をセーラーの袖で擦りながら、木霊先輩は俺に訊く。小声だが、難詰するような色があった。

「工場の息子でしょう？」

木霊先輩は小さく頷く。

「だから——」

恒例のケータイが鳴る。

しかし、木霊先輩は無視した。

「霧島重工ってのが、どういつのかわかってるの？」

いつの間にか、木霊先輩は怒り顔で俺にいう。

「ただの企業ですよ」

それ以上でもそれ以下でもないはずだ。

が、先輩は首を縦ではなく、横に振って、否<sup>いな</sup>んだ。

「日本最大のコングロマリット。政治にも介入してるし、この霧島市は、あそこのいうことに逆らえないんだよ？ 無法地帯なんだよ？ そんなこと、バカらしいって思つかもだけど……だけどね、実際——」

再び、木霊先輩は喉を詰まらせたように、嗚咽を漏らした。

「そんな、俺は大丈夫ですから……」

「うっん。大丈夫じゃないよ……だって、だってね——」

俺は木霊先輩の次の言葉を待つ。

が、言葉は聞けなかった。

鬼が出たから。

部室の戸を突き破って、さっき見た鬼が出たから。

先輩も驚愕した顔をしていたから、間違いない。

俺は木霊先輩を鬼から守ろうと思った。

でも、それよりも恐怖が先にたつた。

鬼の耳まで割けた口が、そこから垂れる某エイリアンのような唾液が、俺の理性も生理的な部分も全部全部、恐れで染めたてた。

窓を突き破った。

開けるのも億劫に思えるほどに、早く退散したかった。

木霊先輩を置いていくのが忍びないとか、そんなこと考えれる余裕なんてなかった。俺は怖かった。ただただ、怖かった。恐ろしくて、だから、逃げた。あのときと、一緒だけれど、怖いものは怖い。鬼が霧島だったら、もう一度殴って、挑みかかることもできたかもしれない。でも、あれは無理だった。

ガラスが制服のカラーに引っ掛かり、首筋を切るのも構わず、俺はひたすらに校庭を駆け抜けて、家に帰って、自室に閉じこもった。もう、あんなもののいる学校にはいけそうになかった。

見舞いが来た。それもそうだ、もう一週間になる。

楓先輩は果物詰め合わせを持って現れた。風邪か何かと思ったら、しい。

が、どう見ても健康な俺をみて、「大丈夫そうね」といった。

「病気じゃないですから」

と俺は答えた。

「え？」

「行きたくないんですよ」

隠すつもりもないので、正直にいう。

「何それ、登校拒否？」

入室して来たときは心配げだった楓先輩の口はへの字になっている。

「そんなもんです」

「今、大変なんだよ？」

「何がですか？」

平生になるように努める。

「木霊だよ……」

木霊先輩か。そういえば、あの後どうなったのだろう。

「そうですか」

俺のそっけなさに、楓先輩は食って掛かった。

ベッドに座る俺に詰め寄る。そして、捲まくした。

「いったよね。優くんいったよね？ 結局、人なんだって、信仰云々よりも、キリストだったからよかったんだって、私、期待してたのに。優くんが沙子のメシアになれるんじゃないかって！」

一体、何をそんなにキレているのか。

でも、一つだけわかる。木霊先輩が大変で、それを俺にどうにかしてほしいと？

恐らく、霧島が関わっている。

木霊先輩が俺を頼っているのではない。勝手に第三者の楓先輩が俺を救世主よばわり、なんて、他力本願っぷり。イラッと来た。

「勝手ですね。自分は逆らえないくせに。他人任せですか？」

「——だって、だって、私だって前は沙子を助けようと思ったんだよ。だけど、だけど……そのせいで、父さん、職を失って……。だから、私が心の支えをしなくちゃって——」

女のヒステリーというのはこういう現象なのかなあと蚊帳かやの外でしみじみと感じる自分がいる。他人事のようにだ。目の前の女もいつていることが支離滅裂で——。

つまり、これは言い訳しているのだ。

適当なことをいって誤魔化す。

楓先輩の十八番、棚上げじゃないか。

「逃げるんですか？」

「逃げてるのは優くんでしょう！ 学校にだって来ないし、なんで？ 心配したんだよ？ 窓破って帰ってしまったって。電話だってメールだってしたのに、出てくれないじゃない！」

それは、ブツチしたから。

話したくないときだってある。人間だもの。  
それに――。

「鬼がいる場所になんていきません」

「鬼？ なんのこと？」

「あの学校にもいたんですよ。中学と一緒に。やっぱ、呪われてるんですね」

「非科学的なところがいいんじゃないの？」

確かに俺はそうだった。

でも、実はその考え方こそがレッテル貼りなのだ。

「そう思いたかったですよ！ でも、あんなもの見れるわけじゃないじゃないですか！」

俺も捲す。

「だからって、沙子をほって帰ったの？ あのとときの更衣室のときの弁は嘘なの？ 嘘なの？ そんなちつさい人間だったの！」

「そうですとも。だから、イジメられたんですよ！ 中学のときも、毎日、毎日、毎日！」

いつてから後悔の波が打ち寄せる。葉桜以外知らなくていい過去なのに。

これこそ、同情を引いて、逃げに転じる悪辣な手法ではないか？ でも、いつてしまった言葉を飲み込むことはできなかった。俺も引けなくなった。もう、意地のぶつかり合い。

「――ごめん……」

「わかればいいんですよ」

俺は鷹揚に応じた。

それに唇を噛みながら、楓先輩はいう。

「でも、助けてよ。私、どうすればいいのさ！」

「何もできないんでしょ？」

そういつてたじゃないか。あのとき、体育館裏で。

「優くん……。じゃあ、いわせてもらうよ？ 優くんのせいで、いま沙子がどうなってるのか。毎日、あいつにいいようにされてて、それをどうとも思わないの？」

「それこそ、楓先輩はどうなんですか？ 日和見ですか？」

「日和見してるのは、あんたでしょ！ 屁理屈にもならず、そんなことばかりいつて、何が鬼さ！ 霧島殴った気概はどこへいったのさ！」

「じゃあ、呼び出してくださいよ。でも、学校へは行きません」

ああ、いくら痛い目に会おうとも、殴れといわれりゃ、殴ってやるさ！ 木霊さんのために！ でも、鬼は無理だ。あんなもの、直視できるものか。

「沙子は？ 沙子はどうするの？ あの子、イヤでもいかないといけないんだよ？ 拒否したら、何されるか、わかったもんじゃないもの——」

「知りません」

「分からずや！」

楓先輩は俺を叩いた。<sup>はた</sup>

張られた頬が熱くなる。

女の子に打たれたのは初めてだった。

「殴りましたね。あなたも同類ですね。楓先輩」

俺は睨む。

楓先輩は押し黙った。

言い争いに勝ったと思った。が、間違いだった。

楓先輩はしばらくの沈黙を経て、低い声を出した。

「いいよ。じゃあ、私が殺してやる」

殺す？

「え？」

「あいつを私が殺す。それで、今までの平衡状態に水をさした、優くん。きみも殺す。これで解決。全部、解決」

楓先輩は狂ったような気味の悪い笑顔でいった。  
殺す。

何度、そう思ったか。

いじめっ子どもを、ブチ殺して、ジェノサイドしてやろうと、思ったことが。

何で？ 楓先輩のような明るいい人がどうして、こんなことを思う？  
急に冷静さが湧き立つ。

ダメだ。それは暴挙だ。やっちゃいけない。でも、そんな宿める、諭す資格が俺にあるだろうか？ —— ない。

「楓先輩……それは……」

制止させる言葉が浮かばない。

俺も中学の時、こんな思いを回りに流していたのか？

本当に？

楓先輩は入滅前の仏陀然として、笑う。

「もういいんだよ。父さんが壊れたのもあいつのせい、あいつが親に掛け合って仕事人間の父さんを解雇したから。それで、母さんはいなくなったし。それで、それも全部、木霊を助けようとした私のせい。そうだよ、ふふ。私も悪いんだ。天罰は私も受けなきゃ、はは」

「待ってください……」

「やだね。覚悟してなよ。優くん、私が天誅を下すのはあいつ、そして、きみ。最後に私」

楓先輩の表情はマジだった。殺す順番のトップがまず、俺だったなら、最初にここで惨殺されてもおかしくない。そんな狂気が彼女の体中から発せられている。

「破門だ！ 皆、破門だ！ 異端には死を、死を、ははは」

これが井塚先輩の恐れた破門……。

「さてよ、楓」

あれ？ この声。噂をすればなんとやら。

「井塚先輩」

「明史い？」

先輩はズカズカと俺の部屋に押しはいる。

「早まるなよ。敵が巨大でも、俺らはガキだし、そんな破滅にはしつてもしょうがないよ。聖人になんかなれないよ。な、楓、頼むから、落ち着け」

あえて、楓先輩が好みそうな語句を選んでいる。冷静沈着だ。いつもの調子がまるでない。それに、楓先輩をとても氣遣っているように見えた。

「落ち着けないね！ 大人だってデクノボーじゃないか！ 父さんだって無力だった！ 結局は暴力なんだよ、そうだよ。信仰なんてクソだよ、人はパンのみに生きることなかれ？ じゃあ、何に生きる？ 力だよ、結局、見えない暴力には見える暴力で示す、見えない暴力が見える暴力と連携してても、私はやる、テロリストの信条だって、そうでしょう、ねっ明史いい！」

「解るよ。解ってるよ。俺だってな。おまえと沙子が親友だったのも知ってる、でも、あのときのせいで、お前ら、ぎこちなくなつて苗字で呼ぶようになって……でも、sonだけ、沙子のために怒れるんだ、それでいいじゃないか」

「よくない！」

ぴしゃりと跳ね除ける。

「あと半年の我慢じゃないか……な」

「いやだ！ あんな、クズは放っておけない！ 始末する。これは、ゴルゴダで死んだキリストと同じ！ 世界のためだよ」

「バカ！」

今度は楓先輩が引つ叩たたかれた。引つ叩いたのは井塚先輩だ。

険悪なムードが支配した。

「バカ野郎どもに朗報」

またしても別の闖入者。又野さんだった。発言者も又野さんのよ

うだ。

傍らには葉桜が控えている。

「このたび、私<sup>わたくし</sup>、又野唯が傷害罪で彼を訴えることにしました」

普段、絶対に聞けない妙な慇懃さで又野さん。

「そんな、前だって学校ぐるみで揉み消されたのに……唯、もっと酷い目にあうから、やめて」

やや今までのヒートアップしていたテンションがクールダウンして、楓先輩は説得するようにいった。井塚先輩のビンタが利いたようだ。

しかし、又野さんは漫然と首を横に振る。そして、なぜか自信満々だ。

「MTN財閥って知ってる？」

又野さんが質問を投げる。

「ああ」

「うん」

通称、MTN財閥、実際はグループ企業体でMTNグループと呼ぶのが正しい。いまだに株主がではなく、取締役から専務まで一族が食い込んでいる同族企業だ。その割に、日本一の国際企業で日本進歩同盟という政党も持っている。霧島重工とちがって、なにかと政治に本格介入していたり、経団連を半ば、牛耳っているので、叩かれることが多い。各種大臣が特定企業と結びついているというのが、何かと庶民はお気に召さないらしい。

「何の略称だと思う？」

又野さんは訊く。

「未来テクノロジーとか凄くダサイのの略だったような……」

「あれ、又野の子音<sup>「インサナッツ」</sup>のみを書いただけ」

全員の目が点になった。

そういえば、又野さん、リッチな家に住んでたなあ……。つまり？

「自分で訴えようかと思ったけど、さすがにアレだと両親がいいましたから、そこは敏腕弁護士に。それと、又野が霧島に圧力を掛け

る」

「うわあ。メチャクチャだあ」

なんという、デウスエクスマキナの展開だろうか……。まさか、又野さんが本当にお嬢さんだったとは。ただの、キチな女の子じゃなかったのね。

「カエデもいつてくれればよかった。あいつが、何をいつてるのか、私、さっぱりだった。それと、ただ、殺すのはダメ。やるなら、いたぶる、翔る」

いかにも又野さんらしい発言をして締めくくった。

「で、どうする？」

井塚先輩は楓先輩に、葉桜は俺に訊いて来る。

木霊先輩の件は解決したかもしれないが、俺は学校へはいかない。これはガチだ。

「どうもしないよ」

「なあ。優、お前がいまの状態なのは……この前いえなかったけど、中学のときと一緒だ」

「で？」

「お前が見た、その鬼とやらは、多分、霧島なんじゃないか？」

葉桜は俺と楓先輩の話を聞いていたらしい。

恐らく、激しい陰悪状況を聞き、入るにはいれなかったのだろう。そうこうしているうちに、井塚先輩と又野さんが登場し、踏ん切りがついた、そういうことだろう。糞の切れはいいにこしたことはないし。

「そんなはず……」

「お前が中学んとき、教室にこなくなったのは、化物が出るからだったよな。解決したあと、どうなった？ 見えなくなっただろう？ お前だつてわかつてるだろ？」

——そうだ。解ってる。楓先輩と神について話していた時、気付いたはずじゃなかったか。俺は恐怖に駆られて、みうしなって、目暗くらになってただけかもしれない、思考の目暗。

「あの、又野さんのおかげで、細かい問題はなくなっただ。あと、お前がすることはなんだ？　いつてみるよ」

俺の肩を葉桜は叩く。

葉桜は今回も俺を救済してくれた。

俺にとつてのメシアは、葉桜だ。やはり、親友は持つものだ。一週間訪れなかったことは不問にしよう。

そして、この場に、木霊さんがいないのは、来れないのだ。俺と一緒にいるところ、もしくは、俺のせいで何度も呼び出しの電話をブツチしたせいで、楓先輩流に言えば、『水をさした』――。俺は水をさした。余計なことをした。でも、済んだこと。悔やんでもいい。だけど、それよりも……。

贖罪すべきなのだ。

パウロはどうした？

十二使徒に列せられることがなかったのは、彼がキリシタンを迫害する側だったからだ。でも、その後、どうした？

今、どうして、聖パウロなのだ？

それこそ、贖罪したのではないか？

人類の原罪とかそんな大仰なことは彼も背負うことはなかったし、それは大工の息子の領分だ。些細なことも、いま、できるじゃないか。

そして、贖罪してもいい。

でも、それを言い訳にしてはいけない。

なぜって、そうだよ。

俺は木霊さんに惚れたんだろう？

それで、いいじゃないか！

「鬼をぶちのめす。で、鬼から木霊さんを奪還する」

俺は強い調子でいった。

「そうだ。それだよ。だろう？　中学のときだって、一発いえば、それまでだっただろう？　逃げちゃダメなんだよ」

うんうんと納得顔で葉桜は頷く。

決まった。腹は決まった。

俺はいないはずのものに恐怖を宿すことで、実体化させ、逃げの理由をつくっていた。木霊先輩はきつと、恐怖から逃げるために、和む幽霊をみていたのだ。だから、俺と一緒にでは何も見れなかった。あのときの、二人で幽霊探しをしていたときの木霊先輩は落ちついていたから、恐怖に駆られる心配なんてなかった。だから、彼女は幽霊をみなかった。初日に、トイレで、と発言した後に、ゴキブリと答えたのは嘘だ。楓先輩に見抜かれるのを恐れていたのだ。だから、あのときも、霧島に暴虐なふるまいをされていたに違いないのだ。

そう、ヤツは鬼畜、まさに鬼。俺の目は正しい。やつは鬼なのだから、鬼に見えて当然だ。ただ、やっぱり、幽霊なんてのはいない化物なんていない。所詮、人間のこと、人間は神にもなり、鬼にもなる、そう見えるし、そういう姿になるのだ！

楓先輩と井塚先輩の方も決まったらしい。

「盛大な破門をしてやろうぜ」

「わかった。うん、破門ね」

まだ、破門の話をしている。大丈夫なのだろうか？

「で、唯。いつ、訴えるの？　まず、警察に連絡じゃないの？」

「うん。警察にはもう伝えてある」

「早！」

手際の迅速な話だった。

木霊先輩を交えて、作戦会議は始まった。

「結局、暴力で報復するのはダメだね」

昨日と打って変わったことを楓先輩はのたまう。

「なら、どうする？　あんな神経の凶太いやつをどうすればいい？」

「憲兵まかせじゃだめ？」

又野さん。毎度、毎度、冷静です。

今思うと、六法全書とか購入して、国家暴力に訴えるというのが一番な気もする。

でも、それでは浮かばれない。

「それって、国家暴力だもの」

同じことを楓先輩が俺の代わりにいう。

「念で攻撃するか」

「それはない」

井塚先輩の提案は速攻、却下された。

「何もしなくていいよ」

木霊先輩がいう。

でも、それはダメだ。

俺らの腹の虫がおさまらない。

もっとも、一年以上、こんな目にあってきた木霊先輩がいうべき台詞じゃない。優しいのはいいけど、それだけじゃ、いけない。

それに、俺は鬼を叩き伏せると誓った。

やっぱり、暴力なのだろうか。

「でも、この件が公になったら、跡目継げないですよネ？」

「そついう、パッシヴな姿勢はよくない」

又野さんがいう。

どっちなんだ。

一番最初にホロコーストとかいいそうだが、いわないんだなあ。

権力者の跡継ぎとしての世渡りテクは霧島より又野さんが数段上な気がした。

「精神的苦痛かあ、難しいなあ」

「だなあ。確かに、このままにしておいても天誅はくだるんだが…」

…」

「じゃあ、逆手に取りましょう。案外、精神的には脆いかもしれない」

「逆手？ 逆手オナ？」

茶化さないでください。井塚先輩。

「見せてあげましょうよ。人の心の化物を。自分がどんな化物だったのかを」

「で、具体的にはどうするの？」

「ノイローゼにしてみます」

俺は提案を皆に<sup>みんな</sup>にした。

皆、とりあえず、その案で行くことを了承した。

最後まで、木霊先輩は渋っていたけれど。

翌日、校内には張り紙とビラが撒かれた。

霧島の悪事をただ書いただけの紙だ。

そんなこと、全校生徒は知っている。

しかし、本人はさぞや気分が悪いだろう。

何でもしたい放題、暗黙の了解が破られたのだから。

実際、廊下ですれ違った、霧島はイラつく表情と大また歩きだった。

合同体育でも、井塚先輩いわく、暴虐なマネをしていないのと。

俺の読みどおり、MTNグループの圧力はすでに掛かっているのだ。霧島はこれ以上悪評を垂れ流すわけにはいかないのだ。そこは、自分が虎の威にして来たものが掛かっているのだから。

そして、翌々日も張り紙は張られ続けた。

犯人は割れている。

月曜日の全校集会では、霧島校長は渋い顔で釘を刺したが、レイケン部員一同はひるまない。

そのまま、檄文は垂れ流され続けた。

ときに、三年生の教室へ行き、霧島を観察した。

もう、霧島はちよっかいを出す気力もないらしく、木霊先輩のケイタイを霧島が鳴らすこともなくなっていた。

あと、少しだと思った。

翌週、ビラの内容が書き換わった。

いままでの文の最後にこう書いてある。

『土下座を要求する』

が、案の定、それに彼は応じなかった。

偏狭なプライドが邪魔をしているのだろう。

水曜日。楓先輩が呼び出しを食らった。

しれっとした顔で、又野さんも付き従い、シラを切ったそう。

実際、追求は厳しくなかった。

教師たちも一応、教育者だ。

いままでの霧島の蛮行を見て、こちらに情状酌量の余地ありということだと思う。

三週目に入った。

さらに文は書き直された。

『謝れば許そう、ただし、土下座だ』

この頃には、警察の捜査も始まるうとしていたが、敢て、又野さんはそれを進めないように手配した。

まだ、追い詰めが足りない。そういうことだ。

そして、三週目の金曜日。

ついに観念したのか、霧島がレイケン部室に姿を見せた。

顔は憔悴していた。

いたぶられる側の気持ちがわかっただろうか？

部員全員、そんな彼を強かで、小バカにする目で迎え入れた。

しかし、俺らは甘く見ていた。

やはり、彼は鬼だった。

悪鬼に違いなかった。

そして、彼を本物の悪鬼に変えたのは、俺らだった。

霧島は、ナイフを持っていた。

一瞬にして、部屋の空気が凍てつく。

首筋を冷や汗が流れ、ますます、体温を下げる。反面、脳は激しく事態を分析しようとフル回転で、熱量が増す。

皆、同じように、氷像のごとく、停止してしまっている。

——やり過ぎたのだ。

「おまえら、調子乗りやがって」

毒々しい声で霧島はいう。目が爛々と輝いている。

見た目は憔悴そのものなのに、眼<sup>まなこ</sup>だけが異様に活気付いていて、映画で見るリビングデッドさながらの様相を呈している。

一旦、落ちて、再起した。彼はゾンビ。オークゾンビ。

皆が動けぬ中、一番、狼狽している木霊さんに霧島は近づく。息が荒い。興奮している。そして、木霊さんの首根っこを掴んだ。

止めさせないと、取り返しが付かない。理性はそう囁くのに、体動かない。

幽霊に対する恐怖心なんかの比じゃない。

目の前の狂人は、人間の姿なのに、恐ろしく、そして、醜い。

「おら、後悔させてやる」

握った刃を木霊さんの首筋に当てる。

余りに悪役っぷりが板に付いている。

俺はダメだった。

偉そうなことをいっても、木霊さんを守れそうにない。

ごめんなさい……。

心の裡<sup>うち</sup>で謝る。やっぱり、ダメだ。

何で同じことをループするんだ。

くそう。くそう。

くそう。

霧島が柄を引いた。

血が舞った。

スローモーションのように、血の筋がはつきり、目に焼きつく。

目が離せない。

離したくない。

離したくない。

木霊さんは悲鳴を上げた。

誰も動かない。動けない。

それを感じて、優越感と愉悦に霧島は笑う。哄笑する。耳をつんざく不快な笑い声が部屋中に響き渡る。胸が痛い。

心臓が締め付けられて、血流が早まる。でも、血管は収縮していて、苦しい。

息をするのが辛い。

辛い――。

違う。

今、一番辛いのは誰だ。

動いた。

動いたのは、井塚先輩だった。

井塚先輩は、投げた。霧島をナイフごと。

掴まれていた木霊先輩が崩れる。床に落ちた。

電撃が体を廻った。

更衣室のときのように体が動く。

井塚先輩が投げ飛ばされた。手首を切られて、鮮血が飛ぶ。

でも、もう、スローモーションには見えない。

むしろ、早まわしに映る。

俺は鬼を叩き伏せた。

自分でも思わぬ力が出た。

鬼は驚愕に顔を染めた。

鬼のナイフが俺を刺す。

腹部が貫かれ、激痛がやって来る。

無視した。

俺の血が霧島のシャツを白いその生地まだらに、赤い斑を生む。

強い力が俺を押す。

構わない。

押し返す。

「処断する」

背後で声。

「第三ポチヨムキン教団の名に於いて、悪魔を処断する」

楓先輩だった。

楓先輩は俺の前、床に倒れている霧島の頭上に向かい、お得意の一発を霧島に浴びせた。

クキヨ——。

そして、全ては終わった。

## 終章（後書き）

読了感謝。

昔に書いたものなので読みにくいかと存じます。多少修正しました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6673f/>

---

幽霊と超能力と突然の終焉

2010年10月8日15時30分発行